

さばえ近松文学賞2015〈恋話 (KOIBANA)〉

受賞作品集

◆近松賞

「夢の夢こそ」

牧 康子（東京都杉並区）

◆優秀賞

「かささぎ橋」

山田 密（神奈川県横浜市）

「ビー玉じゃなくエー玉」

堂埜 咲代子（福井県福井市）

「絹唄」

荒川 栄美（福井県越前市）

◆佳作

「クレマチス越しの視線」

山野内 綾香（福岡県京都郡みやこ町）

「桜切り」

後藤 眞吉（東京都品川区）

「いくひさしく」

「灰聞〜白鬼女橋〜」

「こう姫」

杉原 佳菜（福井県福井市）

渡利 與一郎（福井県鯖江市）

山本 淳子（福井県鯖江市）

◆松平昌親賞 学生部門

「君に会うために」

塩田 きよら（東京都大田区）



特別審査員 藤田宜永氏  
(直木賞作家・福井市出身)

『夢の夢こそ』は小説をきちんと書くことを知っている方の作品で、文章は安定しているし、構成もしっかりしていました。鯖江の眼鏡をどう使うかもよく考え抜かれていたと思います。物語のオチに首を捻った選考委員の方もいましたが、総合点で受賞となりました。

牧さん、おめでとうございます。

優秀賞に選ばれた『かささぎ橋』は、男女の道行きを現代風に扱ったところが評価された作品です。十枚という原稿の中で視点を変えない方がよりよいものになった気がします。

『ビー玉じゃなくエー玉』はセンスのある作品でした。軽く書かれているけれど描写がはまっています。最後のオチが、駄ジャレ風になっていない方がより点が高くなったかもしれないですね。

『絹唄』は人情味あふれる好感の持てる作品でした。読者に驚きをあえるためには、途中で視点を変えざるをえなかったのは分かりますが、それなら最初から二視点で書いた方がより厚みがまったのではないのでしょうか。

佳作に選ばれた作品もすべて読み応えのあるものでした。

松平昌親賞を受賞した『君に会うために』は、文章も構成もよく、表現力もあり、物語も平

板ではなく、14歳の塩田さんの筆力に驚かされました。

正直に言って、一般応募も含め、この作品が私は一番好きでした。

日本人なら日本語は誰でもできるし、パソコンがあれば漢字も簡単に打ち出すことができます。そこに罫が潜んでいる。ちよつとした思いつきに酔い、小説にしてみようと安易な気持ちで書かれ、文章の推敲もされていないと思える作品もありました。そういう作品には高い点数はつけられません。

その点、学生部門の応募作品はすべて丁寧だったし、真摯に小説と格闘しているのが感じられました。

来年も素晴らしい作品が集まることを期待しています。

みなさん、おめでとうございます。

2015年9月吉日

藤田宜永

「どう描かれているか」

小説は、描写と説明と会話から成り立っています。作品の描写力・説明力・会話力・デッサン力を基準に審査をいたしました。作品内容より、その内容が「どう描かれているか」を見ました。近松賞の作品をはじめ、多くの優れた作品はすべて、1つの視点からしっかりと描かれ、書きたかった内容を丁寧に表現し、読み手に感動を与えてくれます。じっくり読み味わっていただきたいと思います。

県内外の皆さんが、漆器や眼鏡、そして鯖江や福井をどう描いているのか、その表現にも着目したいものです。そこから福井再発見の楽しみが生まれることでしょう。

目次

受賞作品

講評・特別審査員 藤田 宜永

総評・審査員長 林 哲治

「夢の夢こそ」 牧 康子

「かささぎ橋」 山田 密

「ビー玉じゃなくエー玉」 堂埜 咲代子

「絹唄」 荒川 栄美

「クレマチス越しの視線」 山野内 綾香

「桜切り」 後藤 真吉

「いくひさしく」 杉原 佳菜

「仄間く白鬼女橋く」 渡利 與一郎

「こう姫」 山本 淳子

「君に会うために」 塩田 きよら

近松の里たちまち



掲載の受賞作品は応募に際し、送られてきた内容をそのまま掲載しており、校正・校閲などの編集は加えておりません。

朝から降り続いていた冷たい雨が、夕方からみぞれになった。史絵は、こんな日は客も少ないだろうと、料理の仕込みを控えめにした。案の定、馴染みの客が二、三組帰った後は、客足がぱったり途絶えた。

そんなとき、背の高い見知らぬ男が一人、引き戸を開けた。髪は長めだが、白いものが混じっている。眼鏡をかけ、黒い革のブルゾンにスラックス、黒いタートルネックのセーターと、黒づくめだった。マフラーだけは縞柄の温かそうな物を身に着けている。どんな職業の人か、見当がつかなかった。

「いらっしやいませ。お飲み物は？」

「日本酒をください、熱燗で」

男は、壁に並べた日本酒の瓶の一つを指差し、マフラーをはずした。レンズが曇ったのか、眼鏡もカウンターに置いた。鼈甲ぶちのしゃれた眼鏡だ。思いのほか、やさしい目をしている。史絵は酒といっしょに、お通しの露味噌を並べた。お通しは季節を先がけるのが、史絵の心意気だ。自分から進んで話しかけるのは控えていたが、男は酒を飲むだけですつと何も言わない。「何か召しあがりますか？」

待ちかねてそう声をかけてみた。男は初めて気づいたように、手元の品書きを見て、さわらの焼き物とたたきごぼうを注文した。

「毎月のようにこの近くに來ているが、今まで気付かなかった。落ち着きたい店だね」

「私一人でやっていますから、たいした料理もお出しできません。家庭料理の延長です」

「もう露の臺を使っているんだ。春の香りがする」と、男は酒をもう一本追加した。狭い店内を見回し、「花もいいな」と言う。酒の客は料理を褒めても、なかなか花にまでは目が行かない。史絵は、その男の細やかな心遣いがうれしかった。やさしかった夫と同じ匂いを感じた。

史絵は、「花の里」という店の名に恥じないよう、花だけはいつも絶やさなかった。その日は、壺にあふれんばかりに、咲きかけの梅の枝ものを活かしていた。小枝を箸置きにもしていた。その時、二人連れのサラリーマンが入って來た。史絵はその相手にとりまぎれ、それから男に声をかけられなかった。男は静かに酒を飲んでいたが、しばらくすると勘定を頼み、席を立った。男は「また、寄るよ」と、白い歯並びを見せた。それが、史絵と豊川の最初の出会だった。

史絵は、三年前、交通事故で突然、夫を亡くした。子供はいなかった。四十歳を過ぎた女にできる仕事はなかなか見つからない。

そんなとき、夫がよく連れて行ってくれた小料理屋のおかみが、老親の介護で店をたたむとい

う。居抜きで店を譲るから、替わりにやってみないかと、声をかけられた。史絵は、料理だけは得意だったから、思い切って引き受けてみた。カウンター席だけの小さな店だったが、前からの客や夫の友人などが絶えず来てくれるので、細々ながら店は続いている。

そのみぞれの日以来、豊川は時おり、「花の里」に立ち寄るようになった。いつも料理は二、三品注文するだけだったが、だんだん酒量は増した。

「そんなにお酒ばかりお飲みにならないで、料理も召し上がってください。お口に合うものを何でも作りますから」

「女房と同じようなことを言わないでくれ」

豊川は、苦笑いして一品くらは追加するが、後が続かない。すぐ酒にもどった。

「俺はもうすぐ還暦だ。息子も一人前になったし、好きな酒をひかえるくらいなら、死んだほうがましだ」と、男は投げやりな言葉をもらすこともあった。

豊川は眼鏡で名高い福井県の鯖江で、越前漆器の工房をやっていて、東京へはその商談に来るのだという。「若い頃は東京の小さな劇団で、裏方から、役者まで、なんでもやっていた。

でも父親が早逝して家業を継がねばならなくなったんだ。東京に来ると、商談の後、昔の仲間に出会うのが楽しみだよ」とも。男の服装は、当時のなごりなのであろう。いつしか史絵は、男の来る日が待ち遠しくなってきた。夫が亡くなって以来、ほかの男にそんなに心が動いたのは初めてだった。

やっぱり冷たい雨の夜、客足が途絶えた店の二階で、二人は結ばれた。「雨が激しくなつたみたい。よろしかったら、泊まっていらつしやいませんか」と、杯を重ねる男の手に自分の手を置いて誘つたのは史絵からだつた。そういう雰囲気が男にもあつた。

豊川は、長襦袢になつた史絵をぐいと抱き寄せると、唇を合わせ、横たえた。手を襦袢の中に差し入れて、乳房から、腰、脚へと愛撫を続ける。ピンがはずれて、史絵の髪が放射状に拡がった。男は、襦袢の腰紐を解くと、やさしく体を重ねてきた。久しく忘れていた史絵の花が、みるみる開き、潤つた。

豊川はその夜、史絵の家に泊つていった。寝物語に、いろいろ鯖江の話しをしてくれた。

「鯖江には、近松門左衛門が育つた里がある。そこに近松の文楽人形が展示されている。きみは、そのお初という人形に、一重まぶたの目といい、小さなくちびるといい、そつくりなんだ。初めて店に入った時、あつと思つた」と言いながら、激しく咳込んだ。

「だいじようぶ？ 病院にはいらしたの？」と背中をさすると、豊川は「ただの風邪だ」といなす。医者が苦手なのだろう。「鯖江は良いところだから、いつか来るといい」と話を続けた。「会つた時から、一度、『お初』を抱きたいと思つていた」と、乳房をまさぐりながらささやく。史絵はうつとりと男の胸に顔を埋めた。男はまた咳をした。

翌朝、豊川は眼鏡を鏡台の上に忘れて帰つた。気付いて通りをのぞいてみたが、もう姿は見

えない。今度来たとき返せばいいと、それ以上、後は追わなかった。史絵は、壺の花を、白い小手毬から紅い侘助椿に活け替えた。そうしたいはなやいだ気分だった。なぜか椿が一輪、ぼとりと床に落ちた。

その日以来、豊川からの連絡がふつつり途絶えた。肌を合わせたあとでは、いつそう、恋しさが募る。あの夜は、男にとつては単なる遊びだったのだろうか。史絵は、自分から電話はかけまいと決心していたのに、待ちきれずに男から聞いていた番号を押してみた。「この電話は、電源が入っていないか、電波の届かないところにあります」という機械音が空しく流れた。

深夜になって、携帯が鳴った。慌てて取り上げると、豊川の名前が表示されている。

「きみの着信に気付いたけれど、病院にいるから、すぐ出られなかった。今、看護師の目を盗んで電話をかけている。落ち着いたら、必ずまた行くよ」

いつもの低い声だった。病院のしーんとした静かさが電話を通して伝わってくる。史絵は、医者嫌いの男が入院しているということは、風邪などではなく、かなり重い病気だと察した。不安にかられた。「きつと、きつとよ」と、それ以上言葉が続かなくて、男が切るまで、携帯を握りしめていた。

それから、いくら待っても豊川からの連絡はない。史絵は、思い余ってまた電話をかけてみたが、前と同じ機械音の流れるだけだ。返信もない。男は亡くなったのだと、直感した。形見

になつてしまつた眼鏡をぎゅつと握つて、「あなたまで逝つてしまつたのね」と、涙をあふれさせた。

四月半ば、史絵はどうしても豊川の生死を自分の目で確かめずにはいられなくなつた。店の休みに、新幹線と特急を乗り継いで、鯖江に向かつた。駅に降り立つと、桜がいつせいに花開き、街中が桜色に煙つていた。どこもかも豊川の話しどおりの美しい街だった。駅前の観光案内所で地図をもらい、まず越前漆器の「うるしの里会館」に立ち寄つて、豊川の工房のことを訊いてみた。

「先日、赤ちゃんが生まれたお家ですな」

「えつ、赤ちゃんが？」

「豊川さんのお孫さんですよ」

半信半疑のまま、史絵は教えられた道をたどつた。なんと家の前に豊川が立つている。生きている。しかも赤ちゃんを壊れ物のように抱いている。かわいくてたまらないというふうに、目を細め、相好を崩していた。

見慣れない黒縁の眼鏡をかけ、服装も、トレーナーにジーンズという普段着だ。そこにいたのは、自分のまつたく知らない男の姿だった。すぐ家から若い男女と、年配の女が出て来て、赤ちゃんを抱きとつた。

物陰から見ていた史絵は、呆然とした。病院というのは、産院だったのだ。そこで豊川は、家族といっしょに孫が生まれるのを待っていたのだ。男の言葉を一つずつ思い出してみた。男は一言も嘘はついていない。騙してもいない。自分が、一方的にとんでもない思い違いをしていただけなのだ。

「ばか、ばか。こんなに客に夢中になるなんて、おかみ失格だわ」と、自嘲の涙と笑いが込み上げてきた。

史絵は逃げるようにそこを後にし、喫茶店に飛び込んだ。コーヒーを飲んで気持ちが落ち着いてから、バッグにしのぼせていた豊川の眼鏡をかけてみた。度が入っているから、世の中がゆらゆらとゆがんで見える。そのゆらぎのなかに、はじめて店に現われたときの男の長身が見える。黙って酒を飲んでいる背中が見える。この眼鏡の中だけには、自分が恋した豊川がまだいた。「でも、いつときの夢だったのだわ」と、史絵はそれをハンカチにくるむと、そっと椅子の隅に残して、喫茶店を出た。鯖江の街は、春霞の中にもう暮れ始めていた。(了)



朝食はハムエッグにサラダ。娘のためにはパンとスープを夫にはご飯と味噌汁。家族に最後の食事の用意をして身支度万端整え、可燃物のゴミ袋と玄關脇の和室に隠しておいたポストンバックを持ち、躊躇うこと無く悠子は夜も明け切らない初秋の街に飛び出した。

ゴミ集積所のネットにゴミ袋を放り込み一度周りを伺い人影が無いのを確認すると、逸る気持ちを抑えきれずに駅への道を急ぎながらふと記憶の中のあの断片が過ぎる。

『此の世のなごり、夜もなごり……』

冷たい夜気の残る街は人も音も 柵しほさえも眠りの中に沈ませたまま、深閑として仄暗い夜の余韻に紛れ込ませ、想い描く結末を鮮明に映し出す。

人影疎らな駅のホームには大きなスポーツバックを足元に置いてスマホをいじっている男子高校生や、中年のサラリーマンが大きな欠伸をしていたり。早朝の緩慢な空気が漂うホームに見知った顔がないことに安堵して、始発電車に乗り新横浜に着く頃には空は白み始めようとして行き交う人も増えてきた。新幹線の切符を買うのに少しもたつきながらも京都までの切符を買いひかりに飛び乗った。ドアが閉まり動き始めると燻っていた常識や分別も景色と共に流されて行く。この日を一日千秋の思いで待ちわびてきた悠子は、とうとう車上の女むすめになり想いが

成就する瞬間を心に繰り返し描いていた。

五十四歳専業主婦、夫は大手食品会社の部長、長男は結婚していて三歳の孫がいる。長女は今春大学を卒業し就職した。そんな順調で幸せな生活を恋のために全て捨てる。老いらくの恋と詰められるだろうが、愛しい相手と結ばれたい。ただ、それだけだった。

小田原を過ぎた頃、娘から携帯電話にメールが来た。「信じらんない！」置き手紙を読んだのだろう。返す言葉も見つからず携帯の電源を切った。理解も祝福も望んでいない軽蔑されても構わない。まさかの恋をしてしまった時からこうなる事を夢想していた。

最初に心惹かれたのはアトリエに掛けられた黄色く色付いた一本の銀杏が、画面一杯に描かれた絵だった。

「僕は福井の鯖江に生まれてから小学校まで暮らしていたんです。この木は三峯の大銀杏と云って、乳受けの大銀杏とも呼ばれているんですが、昔祖父が良くここに連れて云ってくれたんですよ。」

「乳受けですか？」

「ええ、昔この銀杏の木の皮を煎じて飲んだところ乳が出るようになったと云う伝説です。でも、昭和五十六年の豪雪で倒れてしまって、それまでは本当に圧倒されるような大木だったんですけど。ただ木の一部を植えたところ奇跡的に蘇って今ではこんな立派な銀杏に成長し

た。大銀杏と呼ぶにはまだ若いですけど、この木の下に立つとなんだか不思議な気持ちになるんですよ。上手く云えないけど……」

アトリエの主、絵画教室の先生である彼は初めて訪れた時、説明しながらちよつと照れくさそうに笑った。

運動不足解消のためウォーキングを始めた。足の向くまま歩き回り歩調も鈍り始めた頃初めて入り込んだ住宅街の中、一軒の家の前を通りすがりに、玄関の植え込みの葉に埋もれた小さな絵画教室の木のプレートを発見した。まるでしもた屋のような古い木造の家の中から仄かに油絵の具の匂いがした。匂いに誘われるように一週間後、絵心など無い悠子は孝造の生徒になった。

孝造は昼間は主婦、夕方からは小学生から高校生までの子供を教えていた。主婦の生徒は悠子の他に三人、毎週一回のところ悠子だけ別の日も行くようになった切っ掛けは忘れてしまった。

二歳年上の孝造は独身だった。

「今まで、ずっと傍に居たいと思う女むすめに出会わなかったから」

縁側に並んで座り小さな庭に咲いたコスモスを一緒に写生したり、お茶を飲みながらとりとめない話をし、悠子のキャンバスを背後から手直しする孝造の胸の近きときめき。全ての瞬間に互いの心が震え。世間からも隔離され時間が止まったようなアトリエで、二人は切なく見

つめ合い、いつしか逢えない時間を惜しむ関係になっていた。

とは云え、悠子は夫も家族もある身、何より全てを曝け出すには気が引ける年齢になっていた。それはまた家族に対する罪悪感を薄めることにもなり、感情のままに深く孝造にこころを向けさせた。しかし、突然娘が忘れ物だと使わない筆を持ってきたことがあった。何も云わなかったが、娘の目は誤魔化しきれていなかったのだと判った。この時、悠子の中に覚悟が芽生えた。

「この際、鯖江に帰ろうと思っているんだ」

白く雪が積もった庭をガラス越しに眺めながら、突然孝造が云った。アトリエは借家で取り壊しが決まっていた。

「・・・いつ？」

「多分、夏が終わる頃に」

悠子は言葉が出なかった。永遠はない。いつか別れるその日は訪れる。

「以前から鯖江に帰って絵に専念したいと考えていたんだ。・・・もし、出来るなら、君と二人であの銀杏の木の下に立てたら、きつと・・・」

もう離れることは無い。

「ええ、きつと」

壁に掛かった大銀杏は二人に未来を語らせた。

孝造は着流しの男が日本髪の女の手を引き、連れ立つ姿をキャンバスに描いていた。

「近松門左衛門はね福井県出身で鯖江にも住んでいたんだ」

「近松門左衛門って、あの曾根崎心中の？」

「そう。この二人はお初と徳兵衛」

二人が渡る橋はかささぎ橋。

「・・・寂滅為楽なんて本当かな・・・」

死に寄って初めて安楽があるとは心中者への慰め、別れを前に二人はどうとう身体を重ね。

大銀杏の下で再会することを約束した。

新幹線は京都に着いた。一乗谷まではあと二回電車を乗り継がなければならぬ。福井から一両編成の越美北線に乗り緑が褪せた山並みに向かい稲刈りが終わった田んぼが広がる田園風景の中を走り、辿り着いた一乗谷駅は田んぼの中にある小さな無人駅だった。勿論駅前ロータリーなど無い駅を出れば畦道で離れて見える山郷の集落はひっそりとしてとても静かだった。

「ホーツ」

単線の線路をゆっくりと去って行く電車を見送りながら、悠子は置き去りにされたような不安と感歎の入り交じったため息を漏らした。

タクシーの運転手はとても親切で県道から山道に入ると、待ち合わせをしていると云っても

しきりと帰りは自分を呼ぶようにと云った。長年の勘が何かを予感させたのだろうか。

大銀杏の広場にはハイキング客が十数人いて一頻り写真を撮り合うと小道の中に消えて行つた。人が消えた広場で改めて見上げると、黄色く色付いた葉を全身に纏つた銀杏の木は、深い秋の冷たい空気も慰めてくれる。孝造の絵と同じように暖かく包み込んでくれるようで、まだ来ぬ孝造を近くに感じられた。

幼い頃、祖父は孝造を連れ大銀杏まで来た。そこにはいつも祖父よりずっと若い綺麗な女が待っていた。自分が口実に使われていたことは承知していたが、孝造は女に淡い憧れを抱き、女の手を取り肩を抱く祖父に嫉妬を覚え、羨望した。

ある日とうとう祖父が消えた。孝造を置いて女と道行と洒落込んだのだ。それでも孝造は女の事を誰にも云わなかった。ただ、泣いている祖母を見て自分も声を挙げて泣いた。寂滅為樂は本当だろうか。その言葉を知つてからずっと祖父と女のことを考えてきた。

今、銀杏の下に佇む女むすめをあゝの頃と同じ様に木の陰から見つめていた。拾つた銀杏の葉を大事そうにハンカチに挟み、何度目かの溜息を吐く女むすめから目を逸らす。掛け寄り抱きしめたいと叫ぶ心を掻きながら、孝造は寂滅為樂など無いと呟く祖父の声を訊いていた。

こんな結末を心のどこかで予期していた。タクシーに迎えに来て貰い辛うじて最終の電車に

乗った。夢見た場所から遠ざかる。僅かな民家の灯りの中を走る電車の中で、悠子は涙を閉じ込め夢から目覚めるために強く目を閉じ、閉じ込めきれない涙を銀杏の葉を挟んだハンカチに沁み込ませた。孝造が来なかつた理由を考えても意味は無い恨む気持ちもない。

ただ、夢の夢こそあはれなれ。

「帰ってきたら？ 手紙は捨てたから、お土産忘れないでね」

福井に着く頃、携帯の電源を入れると娘から何通もメールが届いていた。一番新しいメールに返事をする。

「了解」

悠子は土産を買い最終の新幹線に乗り、ひたすら明日の朝食の事を考えていた。

それから一年程経った秋の日、悠子は孫を連れて入った本屋で、偶然開いた美術雑誌にあの大銀杏を見つけた。題は「かささぎ橋」黄色く色付いた銀杏の下には、あの時の悠子と孝造が寄り添い立っている。

「おばあちゃん、泣いているの？」

今、孝造との全てが悠子の心に、寂滅為楽と響いていた。

後五分、かぼちゃサラダを詰めればお弁当完成という時にまた始まった。今度はかぼちゃのうんちく？ウンザリ。邪魔。働く主婦の朝の五分は貴重なのに。ムカついた。『探さなくてください』とチラシの裏に書いて仕事に出た。こんな時は買い物にかぎる。商品券も貯まった事だし、仕事帰りにデパートに行こうと決めた。久々の福井駅前。北陸新幹線は動き出した。福井まではまだ来ていないが、駅は新しくなりアーケード街もなくなってしまう。左へ進む。そう、この辺に果物店があった。若かりし頃の夏を思い出す。

「祥ちゃん、新しいバイト来るから教育係な。」と店長が軽い口調で言う。

「またですか？大学生でしょう。苦手だわ。」

「去年の女子大生はひどかったな。今度は男子国立大生、二十三歳、鯖江から来る。まあ大丈夫やろ。」と笑いながら言う。

「二十三歳って事は……。」自動ドアが開いた。新しいバイト君らしい。店長が粗方仕事の説明をした。その後

「祥ちゃん、頼む。」と言って任された。



「青井浩です。よろしく願います。」

「吉田祥子です。よろしく。まずは、包装の練習からいきますか。ちなみに、熨斗紙って知ってる？蓮熨斗はわかる？」どちらも知っているようだ。常識はありそう。まずは合格ってどこか。お客さんに呼ばれたので、新聞紙で箱を包む練習をもらった。戻って来ると、当たり前だが真面目に練習していた。去年のバイトさんは集中力も無く、熨斗すら知らなかった。遅刻も多かった。だから大学生が嫌いになった。いや、それだけではない、奨学金で高校を出た私は、親のスネをかじれる奴に嫉妬しているのだ。貧しいのは心の方か。ひねくれていると、自覚している。

昼休みは、二人ずつ交代でとるようになっていた。バイト君と一緒に休憩に入った。食堂などは無く、店の奥の倉庫兼ロッカールームを使用している。ダンボールに板を渡し、丸椅子を二つ並べた食卓。薄暗く、狭い。当然倉庫なので、食事中に物を取りに來たり出入りが激しい。前のバイトさんはこんな所では食べたくないと外食ばかりしていたが今回のバイト君は、「弁当を持ってきたから、ここで食べます。」と言った。そして、自分で握ったであろう大きいおにぎり一個とカップ麺一個を出してきた。次の日は、おにぎりとラムネだった。

「老婆心ながら、ん？老婆ではない、お節介だけど、ご飯にラムネ？その組み合わせは如何な物か。」と言ってしまった。

「ラムネのここにあるコレ、何っていうのでしょうか？」なんだ無視か。そしてクイズか。

「ビー玉のこと？」

「ブー、これはエー玉。A・B・CのA。A級品って意味です。瓶とぴったりサイズが合っているのをエー玉。合わないのをビー玉って呼ぶようになって、玩具として出まわったってことです。諸説ありますが。」

「へー。知らなかった。」その後も彼は毎日大きなおにぎりを食べていた。私のお弁当を羨ましげに見たので、つかかわいそうになり好きなものを一品あげた。パクリと一口で食べた。いつしか、食べて貰うために多めに作るようになった。そして、お礼にと思っただけ、面白いうんちくを聞かせてくれた。だんだん慣れてくると、二人の会話も増えた。ある日思い切って聞いてみた。

「二十三歳で大学生って事は、浪人？」

「いや、高校の時、大きな交通事故に遭った。それで長期入院。学校やめよかなとも思ったけど、なんか悔しくて続けた。何よりも体操ができなくなった事が辛かった。おかげで勉強ばかりするようになった。まあ、年下の同級生も気を遣ったやろけど。」

「ごめん……。」鯖江の体操部といえばそれはそれはハイレベルではないか。言葉が出ない。

「そんなに落ち込まなくてもいいけど。それより、何で、シヨウちゃんと呼ばれてるの？ちいさいから？」えっ、話変えてくれてる。優しさを感じた。

「それやったら、ちいちゃんと呼ぶでしょ。前に吉田さんがもう一人いて私が後からここにき

たから、下の名前で呼ばれているわけ。今、何気に失礼なこと言ったね。」

「悪い。怒った？小さくて可愛いと思つたから。うそくせーか。」

「全然フォローになつてえん。」いつの間にか、彼は私にため口になつていた。一つ年上なんだし、ま、いいか。

お盆が近づき猛暑が続いた。冷房も人が多くなると追いつかない。有線から流れてくる流行の歌が暑さに拍車をかける。贈答用の箱入り果物が売れる。補充が間に合わない。手のすいた者から一人ずつ昼食のみとする事にした。三時過ぎにようやく落ち着いた。そんな中、店に緊張が走つた。

「昨日買った桃がまずかつた。」とクレーム。

「レシートと桃を持ってきてくだされば交換か返金しますが。」と言うと

「そんなモンあるか。」と怒鳴る。たぶん何も買つてはないと思うが……。ドアの方に向かつたのでホツとした。帰り際、腹癒せに店頭の桃を二、三個触つていった。バイト君が追いかけてようとするのを必死で止めた。彼は腹の虫が治まらないようだった。遅い昼食から戻つた店長に、ことの次第を報告すると、「分かつた。その桃、皆で食べていいぞ。」とありがたい言葉。切り分けて三時のおやつとなつた。あんなに怒つていたバイト君がおいしそうに食べていたので皆が笑つた。

お盆を過ぎると急に客が退いた。まだ暑さが残る。そしてバイト君とも今日でお別れ。

「一緒にご飯食べるのもこれが最後だね。」と言ったが、聞いていなかったのか

「祥ちゃん、レッサーパンダとジャイアントパンダとどっちがかわいいと思う？」普通ありがたいどうぞございました。とか、お世話になりました。という言葉が返ってくるのでは……。

「レッサーパンダ！」

「今度の水曜日、見に行こう。休みだよね。」

「うん。」休みだという事に頷いたのだが

「十時、福井駅集合、持つて来る物無し。車で迎えに来る。」と一方的に話を続けていた。ひっかかった感はあるが、うれしい。レッサーパンダといえば西山公園か。遠足で行ったきりか。熱弁は続いたが、こっちは舞い上がってしまつて頭に入つてこない。たぶんレッサーパンダがいつ来たかとか、語つていたと思う。

ついに水曜日。歩きやすい低めの靴に、ピンクの小花のワンピース、麦藁帽子をかぶつて行った。服選びに悩みすぎて、予定のバスに乗り遅れ次のバスに乗った。バスを降りてから走つたので何とか間に合った。帽子を押さえながら走る姿をしっかりと見られていたらしく、車の中では、散々走り方が変だと笑われた。運動神経が鈍いのがバレた。西山公園に到着。今はつづじも終わり、レッサーパンダも暑さでぐったりしている。ツクツクボウシが鳴いている。秋がそこまできている。

「もう少し涼しくなつたら、元気になるけどなあ。あ、こっち向いた。」と彼。

「お腹は皆、黒いんやね。」と私が言うと

「それ、前言った。聞いてなかったな。力説したんやけど。」ああ、あの時そう言ってたか。仕方ないなといった表情でもう一度うんちくを聞かせてくれた。今度はしつかり聞く余裕があった。やはり西山公園はゴールデンウィークがピークかとも思ったが、それでも楽しい。一緒に山道を歩くだけで良かった。山を降りる途中、年配の男の人が歴代の総理大臣の名前を言いながら登って来た。おかしくて、でも笑ってはいけなそうと思いつむいた。横を見ると彼は、全く笑ってない。ハイ、ハイと相づちまで打っていた。それがなおさら笑える。時々休みながら下まで降りた。トイレに入った時に、外で彼が誰かと話している声が聞こえた。外に出てみて分かった。さっきの年配の人だ。近所の人でいつもこの公園をぐるりと一周しているらしい。七十八歳だった。私たちよりもはるかに健脚だ。別れ際に

「どうぞお元気で。」と言った

「夫婦仲良くね。また逢いましょう。」と言われた。私も彼も否定しなかった。面倒だからじやなく、うれしかったから。車の中でどんな話をしてたのか詳しく聞いた。

「で、何で歴代総理の名前言ったの？」

「あ、聞いてない。」肝心な所が抜けている。私はどうしても気になった。その後も、二人で二度行ったが、逢うことは無かった。聞けずじまいとなってしまう。

信号が青になった。同時に電話がなった。

「今、どこ？」

「探さないでくださいって書いたでしょう。」

「電話くださいって読めるけど。」

「今、福井駅前。デパート寄つてくから少し遅くなる。」

「一時間で買える物できるか？ 迎えに行く。一時間後福井駅で待つてる。あ、あれ買って来て。急に食べたくなった。」

「カレー味でいいよね。了解。」

あれから三十年。あの年配の人はどうしただろう。もう生きていないか。デパートで買い物と済ませ、通りの向こうの今川焼き屋さんに行った。カレーとクリームを買った。急がないと。後五分しかない。駅まで走った。向こうに車が見えた。信号待ちしている。いい感じで間に合いそう。ほぼ同時に着いた。

「相変わらず、走り方ダセエな。」

「うるさいわ。今度の休み、西山公園連れて行って。」と言って熱い今川焼をほつぺたに当ててやった。あの時のご年配の方、私は今この人のエー玉になっているのでしょうか？

規則正しい織機の音が鳴り止み、仕事を終えた女工達が帰って行った。

しかし平吉にはまだ仕事が残っている。今から隣接する蔵で、織り上がった羽二重を運び出す明日の荷造りをしなければならない。

蔵に行くと、ここ坂野機業の一人娘菊代がいた。ふいに現れる菊代は、ちらりと平吉を見たもののそのまま唄い続ける。

へ水に晒せし羽二重の肌さえ白き弁天と契も長き長泉寺／逢うて別れのきぬぎぬに又の逢う日を松ヶ阜

鯖江の芸妓たちが唄う長唄だ。どうしても唄いたくなると菊代はこっそり母屋を抜け出し蔵に来る。この唄は菊代のお気に入りらしく平吉まで覚えてしまった。

平吉はもともとここで働いていた女工の一人息子。十五才のとき両親を流行病で亡くし、主人の善郎が引き取った。当時菊代は八才。大手機屋の一人娘だというのに芸妓のお師匠さんに長唄を習っているのも、三味線の音につられ師匠の家の玄関先で毎日のように唄い踊り続ける娘に善郎が根負けし、手習いという名目をつけることで許したという話だ。

臆することを知らない菊代は、平吉にも屈託なく接してきた。大人達の気遣いに息つまりを

感じる中で、菊代という時だけ息を吐き出せる気がした。次第に菊代に会えない日は物足りなさを感じ始め、十年たった今では菊代を待ちわびている自分に気づいていた。

昭和の初め、福井県は輸出羽二重の産地だった。その絹織物産業は福井県の各地に広まり、ここ鯖江でも多くの機屋が羽二重を織っていた。坂野機業はその筆頭であった。

そんなある日、片付けを終えた平吉が蔵のランプを消そうとした時、菊代が飛び込んできた。「平吉、うちの唄が褒められたんやで」

頬が上気し目が煌めいている。

「褒められたって、お師匠さんにですかい？」

「ううん。東京の人。道に迷って、たまたまお師匠さんとここに道を尋ねてきたの。そしたらうちの唄が聞こえたもんだから、聞かせてほしいって入ってきて。見知らぬ人の前で唄うなんて初めてやし緊張したけど、重原さん、あつその人やけど、東京で唄わせたいって。ちゃんと名刺も紹介状も頂いたんやで」

「そんなうさんくさい話……。お嬢さん、本気にしたんですか？」

「お師匠さんも一緒に話を聞いてちょうだって、浅草の芸妓に唄一本で誘われるなんてほんとはあるんやねって驚いてなったわ」

嬉々と話す菊代を見ながら、平吉は十日前のことを思い出していた。十日前に蔵にきたのは、主人の善郎だった。



菊代と結婚して坂野機業を継いでくれないかというのである。

「突然何をおっしゃるんですか」

「いや突然ではない。前々から考えていたことだ。平吉は坂野機業に必要やし、あのじゃじゃ馬を相手にできるのもお前だけや。あんな娘にしまったのは恥ずかしい話だが」

「あんな娘やなんて。お嬢さんは自分に正直なだけです。決して気ままで振る舞っているわけではありませんよ」

つい語気が強くなる。

「すみません。俺が熱くなるとこやないのに」

「だからこそや。今すぐとは言わん。菊代を一生の伴侶として考えてみてもらえんやるか」  
旦那の丁重さに平吉はうなづくだけだった。

「ねえ、聞いてる？」

はつと我に返ると菊代が平吉をのぞきこんでいた。見上げる瞳が煌めいている。

「何でしたっけ？」

「東京行きをおとっちゃんに話してみる。そう簡単に許してもらえないだろうけど」

「お嬢さんは後継ぎですさけ」

「……そうやよね。やっぱり夢で終わらなあかんよね。分かってたんや、無理やつて。うちは親も機屋もみんとあかんで」

いつも我を通す菊代があっさり引き下がり平吉は戸惑った。しかし、諦めねばともがいてい  
る菊代の胸の中は痛いほど分かる。菊代にとって唄うことは息をすることと同じだと知ってい  
るからだ。

「唄はどこにいても唄えますさかい」

平吉がかけられる精一杯の言葉だった。

菊代はそれに答えず蔵を出ていった。

それから菊代は蔵に来なくなった。蔵に来ずとも時折菊代と言葉をかわせば、さして変わつ  
たところもない。ひよつとすると菊代も結婚の話が聞かされ、これまでの平吉との関係にけじ  
めをつけようと蔵に来なくなったのかとも思うが、どことなく腑に落ちない。平吉は言い知れ  
ぬ歯がゆさを持って余していた。

それから一か月たち、蔵の明かりを消して外に出ると暗闇に菊代が立っていた。手荷物と三  
味線を持っている。

「どうなさった？お嬢さん」

「うち、家を出る」

「出るって。なんかあったんですかい」

「……唄が、枯れてしまっそうなんや」

菊代は平吉を見上げた。平吉には菊代の瞳も枯れかけているように見えた。

「だからって。旦那さんには？」

「言えるわけない。黙って東京に行く」

相変わらずだ。向う見ずな意志の強さ。この地に自分を収めねばと思うほどできない反動が菊代を大胆にさせてしまう。

ふと伴侶とは何かと思う。瞳の枯れた菊代と生きていけるのかと我に問うてみる。

深く息を吸い込んで平吉は菊代に言った。

「お嬢さん。そんな恰好で出て行ったらすぐにばれてしまいます。本気で家を出る気ならこの荷車の機の中に隠れていかれたらいい。見つからんように明日一駅向こうの駅まで行きますさかい」

「そんなことしたら平吉も、ぐるや思われる」

「俺は、お嬢さんが息をしてくれたらそれでいいんです」

菊代は額を平吉の胸に当てた。平吉は両手に力を入れ、脇から離れぬようじつと耐えた。

「お嬢さん、荷を出す明日の夕刻まで荷車の中ですよ。駅まで二時間は揺られなあかん」

「それぐらいなにさ」

「それでこそお嬢さんや。その覚悟忘れんといして下さい」

暗闇の中で二人は動き始めた。荷物をかかえうずくまるように荷車に横になった菊代の上に、平吉は羽二重の機を積み直し、最後に大きな布で覆い紐で縛る。

翌夕、平吉は荷車を引き機屋を後にした。

菊代は激しい揺れにもじっと耐えた。

「お嬢さん、着きました」

平吉に声をかけられ、機の中から身を起こした菊代は目を見張った。

「おとっちゃん」

荷車の脇に腕組みした善郎が立っている。着いたのは駅ではなかった。平吉は駅に向かっているように思わせ機屋に引き返したのだ。

思わず菊代は平吉を睨む。

「なんてひどいことするんや」

「お嬢さん、言わなあかんことは、ちゃんと言わなあきません」

平吉の静かな声に菊代は荷車から降りた。

「東京で唄いたいの。行かせておとっちゃん」

菊代が手をつき頭を下げる。

「そんななあかんに決まってるやろ」

善郎の低い声が響く。

「娘を預ける方に御挨拶もせんなんてあかんに決まってる。芸妓になるにも筋は通さなあかん。まずはお師匠さんにこれまでの手習いのお礼をわしと一緒に言いに行つてからの話や。ちゃん

と着替えてこい」

平吉を見る菊代。平吉は優しくうなずいた。

「ありがとう」と菊代は家へとかけて行つた。

「これでいいんか、平吉」

「はい。勝手に言つて申し訳ありません」

平吉は善郎に深々と頭を下げた。

昨夜菊代を荷車に隠したあと、平吉はすぐに善郎のところに行き事情を話した。激昂する善郎に、平吉は必死で頭を下げ続けた。

「どうかお嬢さんの覚悟を見てやって下さい。織りあげたばかりの羽二重はごわごわと硬くて、臭いもきつい。そんな中に隠れてでも何としてでも行くお嬢さんを認めてください」

「わしはこうと決めたらひかない娘だと諦めてもいい。しかしお前はそれでいいのか。わしはお前が菊代に惚れとると思つたんやが」

「伴侶になることがお嬢さんの息を止めてしまうなら、私にはできません。しかし私にはお嬢さんの息を止めるすべてのものを、代わりに引き受ける覚悟はできとります。私が坂野機業にも旦那様にも一生尽くしますさけ」

明け方近くになつて、善郎はついに折れたのだった。

菊代が東京に行つてから、平吉はますます仕事に精を出した。善郎の片腕となつて坂野企業

を盛り立て、鯖江の羽二重産業に力を尽くした。

五年後。菊代から葉書が届いた。

浅草での近況を綴った後に書かれた名前は

「絹乃」になっていた。

返事の代りに平吉は白生地の羽二重を黒染めにして菊代に送ることにした。芸妓の正装である黒紋付きにしてもらうためだった。しかしそれはもしも菊代が帰ってきたなら、その時は思いを告げ、真っ白な花嫁衣装に仕立てるつもりの羽二重だった。

へ逢うて別れのきぬぎぬに又の逢う日を松ヶ阜……心から主へつくさん誠照寺／ヨイヤヨイヨイヨイトナー

外回りのついでに染めに出そうと、始業前にその羽二重を隠していた蔵に行つたとき、菊代の唄がふいに頭をよぎった。

まもなく女工たちの賑やかな話し声が聞こえ、機を織る音が蔵の中まで響いてきた。

平吉は蔵の扉を閉め、陽差しの眩しさに目を瞬かせながら規則正しい織機の音に合わせるようにして歩き始めた。

郁さんは、視力がすこぶる良い。万年眼鏡男子の僕より遥かに良く、遠くの看板の文字だつてスラスラ読める。

そんな郁さんは、メタルフレームの赤い伊達眼鏡を愛用している。テンプルに透かし花模様があしらわれたそれは、彼女のトレードマークだとみんなが口を揃えて言う位に。

ある日、郁さんの眼鏡が壊れた。件のテンプル部分がバキリと折れてしまったのだ。

「酷いのよ、これ」

酔った父親が踏んだという眼鏡は、折れた上に形をくにやりと変えてしまっていた。

「直してちょうだい」

「難しいね。少なくとも、僕にはちよつと荷が勝ちすぎる」

「比呂くんはアイウエアデザイナーでしょ。どうにかしてよ」

僕はアイウエア——眼鏡のデザイナーであり、職人ではない。多少の修繕知識はあれど、ここまでぼろぼろになったものの修理なんて、そうそうできやしない。

「知り合いの職人さんを紹介するよ。どうにかなるかもしれない」

郁さんのほつぺたがぶうと膨れる。眼鏡のなくなった顔は、相変わらず可愛いけれど少しだ

け物足りない。

「私は、あなたに直してもらいたいのよ。比呂くん」

「だから、難しいって言ってるじゃないか。ねえ、こうしよう。今僕が作ろうとしている眼鏡を君に贈るから、それをこれから使つてよ。色は何がいいかな」

「私はこの赤い眼鏡がいいのよ」

郁さんはとても頑固である。塗装のすっかり剥げた眼鏡を、何年も飽きずにかけているのもその性格ゆえのことだ。

「困つたな」

言い出したら聞かないことは分かっているけれど、だからといって僕にこの眼鏡をどうこうできる腕はない。自分の眼鏡の蝶番の部分を指先で摘まみながら、折衷案をひねり出そうとする。どうしたら彼女は納得して笑ってくれるだろうか。

「直してよ」

意志の強そうなアーモンド形の瞳が、遮るものもなく僕を見据えてくる。ああ、この目に弱いんだよなあ、僕は。

ため息を一つついて、赤い眼鏡を取り上げた。

「もし方が一僕が修理中に壊してしまつたら」

「許さない。わかつてるでしょ、大事な眼鏡なのよ」



「ですよねえ」

背水の陣で挑まなくてはいけないわけだ。これは何とも、難題である。

「それまでは、こつちを使ってあげる」

僕の机の上に置かれたいくつかのサンプルの中から黄色のフレームの物を取り上げて郁さんが言う。

「じゃあ、よろしく」

郁さんはいつもと少し違う顔をして、僕の仕事場を出て行った。その背中を見送った僕は、ため息をつきながら電話を取り上げ、師匠とも呼べる人に修理のやり方を教えてくれと頼んだのだった。

「——ふん、デザインが下手だな。透かし模様は上手く入れないと強度が落ちるんだよ」

眼鏡作りのいろはを僕に教えてくれたのは、眼鏡修理工房を営んでいる伯父だった。伯父の仕事ぶりを見て、僕は眼鏡に携わることを生業にしたのだ。その伯父は、郁さんの眼鏡を見てとつてくすりと笑った。

「それ、僕の処女作なんだ……」

「ほう、そうか。じゃあ下手で仕方ねえか」

折れたテンプルの細工を、出来の悪い子どもを見るような目で眺める伯父が、益々瞳を細め

た。

「おお、お前も隅に置けねえな。これ、女の子へのプレゼントだろ。エー、エー、だつて」  
細かく彫った文字を辿つて伯父が笑う。僕は曖昧に頷いた。

そして、この眼鏡を大事に使つてくれた女性を思いだす。アーモンド形の瞳を細めて笑えば、左側に笑窪がぼくりと出来る、とても可愛らしい人。

比呂から、奈津へ。奈津は僕の恋人だった。奈津は、僕がまだデザイナーの駆け出しの頃に、事故で亡くなった。彼女の命は消えてなくなったのに、下手くそな眼鏡だけは無傷で、数年たった今でもこうしてこの世にある。

伯父の手の中にある眼鏡を見ながら思いを巡らす。

僕は、奈津の為にこの眼鏡をデザインした。目の悪い奈津に、奈津の好きなクレマチスを施して、奈津の好きな赤を使つた。奈津の為の眼鏡だから、奈津がいなくなった今、この眼鏡は壊れたままでもいいし、もつと言えどもういらぬものだ。

わざわざ修理する意味など、ない。

だけど、この眼鏡が大事だと言う人がいる。

奈津の双子の妹である郁さんの、奈津にそっくりな顔を思い出す。奈津と郁さんの違いは、郁さんの方が意志の強そうな激しい瞳をしていること。それと、郁さんの方には笑窪がないことだ。

郁さんはどうして、目も悪くないのにこの眼鏡をかけ続けるのだろうか。奈津の遺品だと思うのなら、大切にしまっておけばいい。彼女が、「使うこと」に拘る意味が、解らない。けれど彼女は塗装が剥がれようと、ねじが緩もうと、この眼鏡を毎日かけ続けるのだ。

「俺なら直せるけど、比呂が修繕するんだよな。ちよつと、難しいぞ」

「覚悟してる。ご指導、お願い致します」

とりあえずは、これを直すことから始めなくてはいけない。上手く修理ができたとき、彼女の意図を訊いてみようか。最後に会ったときの郁さんのふくれっ面を思い浮かべながら、僕は壊れた眼鏡を取り上げた。

「クレマチスが歪になってる」

どうにか修繕できた眼鏡を郁さんの元へ持って行くと、伯父よりも厳しい目で眼鏡を眺めまわされた。

「これ以上やると折れちゃうんだ。僕の方じゃどうしようもなくなるんだよ。勘弁してください。その代わり、塗装をやり直したから綺麗だろう？」

「ふうん、ちゃんと比呂くんが修理したのね」

「勿論だよ。プロがこんな仕事するはずがないだろう」

「じゃあ、許してあげる。確かに綺麗になったし」

黄色のフレームからいつもの赤に変えた彼女が、僕を見て「どう？」と訊いた。

「見慣れたいつもの君だから、いいと思うよ。だけど、さっきの眼鏡もすごく似合ってたけどな。郁さんは黄色が似合うんだね」

そう言うと、彼女が顔を曇らせた。下手なことを言っただつもりはないけれど、何がいけなかつたのだろうか。

「私は奈津と同じ顔じゃない。なのに黄色がいいっていうの？」

「だって、郁さんは奈津と同じようで違うよ」

「そんなこと言わないで！」

激高して声を荒げた郁さんに驚く。目を瞬かせた僕に、郁さんが迫る。

「私が初めてこの眼鏡をかけた時、嬉しそうにしたじゃない！ 奈津かと思っただって、少しだけ笑ったじゃない！ なのに何で、今になってそういう事を言うの！」

そうだったのだろうか。僕は、そんなことを彼女に言っただろうか。いや、言っただ気がする。

ふいに喪った恋人が鮮やかに蘇った気がして、僕はそれに救われる思いがしたんだ。

奈津に良く似た、しかし奈津とは違う郁さんが、目に涙を溜めて僕に言う。

「奈津みたいだって、そう言って比呂くんは私を真っ直ぐ見てくれたじゃない。奈津に向ける目と同じ目を私に向けてくれたじゃない。私、それが嬉しくて、だから……」

「奈津に向ける目……？」

「そうよ。この眼鏡をかけていたら、比呂くんはいつだって優しく私を見てくれた。この眼鏡をかけている時だけは、私は比呂くんの恋人の奈津になれた。だから眼鏡だって、比呂くんに直してもらいたかった。奈津になら、そうしたでしょう？」

僕は、なんて告白を訊いているのだろうか。喉の奥が熱くなる。

「あの、さ」

「なによ」

「自分の視線なんて意識していなかったけど、僕は随分と前から、君を郁さんとして見ていたつもりなんだけど」

「え？」

「眼鏡をかけた君は奈津じゃなくなつて、郁さん。そう思つて見ていたよ。その僕の目に、奈津に向けたものと同じものが宿っているとしたら、そういうことだと思つて欲しい、んだけれど」

彼女を窺うように見ると、見る間に顔が赤く染まつていった。

「そこで、お話なんだけど。さつき君に勧めた黄色い眼鏡は君のためにデザインしたんだよね。だからさ、その眼鏡もかけてくれないかなあ、なんて」

どうか、と訊くと彼女の瞳が不安げに動く。

「君もまた、奈津の眼鏡越しじゃなく、君の眼鏡越しに僕を見てくれないかな」

彼女が慌てて赤縁の眼鏡を取り、黄色をかけた。真つ赤な顔で、僕を見る。普段より瞳が弱  
弱しい。そんな彼女に、僕は精いっぱい笑みを向けた。

「とても素敵だよ。きつと、君に似合うと思つてデザインしたんだ」  
フレーム越しの瞳が、とびきり可愛く笑った。

もうすぐ一周忌を迎える妻がたいへん好んでいた水羊羹を買いに、「ふくい南青山291」まで来た。東京にいながら遠い福井県の物産品をいろいろと買うことができる店で、渋谷桜ヶ丘の我が家から歩いて三十分ほどの距離にある。店の前の通りの一本の桜の巨木が折りしも満開になり、午後の日を受けて全身をまばゆく輝かせていた。

店の中は、何時にきても程良く客が行き交っている。焼き鯖やへしこなどの海産物が並んでいる冷蔵ケースを覗いていると、一人の女性が傍からすつと細い手を伸ばして小振りのへしこを手に取った。見れば妻の友人の佳子ではないか。明るい灰色のワンピースに羽織った濃い緑の上着が、上品でとても美しい。

「佳子さん、こんにちほ。珍しいなあ」

「あらっ、びっくりした」

「その節はどうもありがとう。今日は我孫子からわざわざここまで？」

「ううん。主人が築地に入院しているの。見舞いに来たついでに……。私、福井の生まれですよ。ここは以前から時々来てたのよ」

「そうか。ご主人、ご病気ですか……」

「ええ。あまりよくないの」

妻の通夜以来一年ぶりの突然の出会いに、佳子はやや上気し顔を赤らめている。私は彼女を近くのヨックモックの喫茶室に誘った。

「佳子さん、福井のどこでしたっけ？」

「鯖江」

「ああ、鯖江か。鯖江といえば、ほら、僕的眼鏡、これが鯖江の製品ですよ」

鱈甲を模した太縁のフレームが気に入り、五年ほど前から愛用している。

三十五年前、私たちは千葉県の我孫子市の新興住宅地で、隣人同士だった。子供同士が小学校の同級生だった関係で、佳子と妻は非常に親しく互いの家を行き来していた。時折訪ねてくる佳子の美貌と聡明さ謙虚さに、私は強く惹かれた。時にはショートパンツをはいて芝生の手入れなどをしている佳子の伸びやかな肢体を眺め、胸をときめかせました。

妻は日ごとに佳子との親しさを深め、佳子さんが、佳子さんがと、毎日の交流振りを私に逐一報告する。妻の佳子への好意は、恋愛感情に近いものがあつた。私も「俺は佳子さんが好きだ」と公言していた。ある日彼女が我が家でお茶を飲んで帰った直後に帰宅した私は、つい今しがたまで佳子が座っていたという、かすかに温もりが残っているソファに頬擦りをして、妻を笑わせたりした。

子供会の遠足のバスの中で、息子が酔って嘔吐を催したときに、隣にいた佳子が咄嗟に両手



で嘔吐物を受けてくれたことがあった。感に耐えないという妻の報告に、私は深い感銘を受けた。心底からのやさしさがなければ出来る事ではない。それ以来、私の佳子に対する思慕はさらに深まり、また妻の佳子に対する親愛の情は一段と厚くなつて、尊敬の念さえも加わつた。

「姿子さん、水羊羹がお好きだったのね」

「うん。いつか佳子さんにもらつてから大好物になつて …」

「うれしい」

「ご主人大変ですね」

「ええ。もう、ほとんど諦めてはいますけど」

「四人で柏の蕎麦屋に行きましたね。何年前だろう？」

「ほんと。皆、まだ若かつたわ。奥様がなくなつてお寂しいでしょう？」

「さびしい」

「再婚はなさらないの？」

「佳子さんみたいな人がいれば …」

「ふふふ」

佳子と私が急激に親しくなつたのは、新興住宅地の運動会がきっかけだった。図らずも私は佳子と二人三脚を組み、一緒に走る事になった。私の右足と佳子の左足をきつく縛る、それ

だけでも幸福感に胸が膨らむというのに、体を寄せ合い、佳子の息遣いを身近に感じながら肩を組んで走るという幸運に、私は息苦しくなるほど興奮した。

私たちは一番でゴールしたとたんに足がもつれて倒れこんでしまい、佳子は足首を軽く捻挫したようだった。痛がる佳子に「ね、おんぶして」とせがまれ、熱く柔らかい女体、わけても張りのある二つの乳房の感覚を薄いシャツを着た背中に感じながら、私は彼女を救護所まで背負って行ったのだが、救護所に着くと佳子はけろっとして立ち上がり、いたずらっぽく私に笑いかけた。

それからは、一触即発という雰囲気になることが何度かあった。ある日は妻の留守中に回覧板を持ってきたり、ある日はまた妻の留守中に手作りの五目すしを届けてくれたりして、玄関で立ち話をするときの、男心を蕩けさすような香水の匂いや、思わせぶりといえはそう見えなくもない、彼女のえもいわれぬ風情、なにやらじれつたような素振りには、私の行動を誘っているようにも感じられた。

「佳子さん、ちよつと手を見せて」

「え、どうして？」

私の顔を下から覗き込むようにする佳子の、いたずらっぽい眼がとても可愛い。

「これが息子の汚いものを受けてくれた手なんだね。きれいだ」

接吻しようとする手を邪険に振り払って、佳子は逃げ帰った。

佳子の夫は休日にはゴルフに行くことが多く、私の妻は絵画教室で留守にすることが多かった。ある秋の休日、私が書齋で会社の宿題を片付けていると、隣から佳子が弾くピアノの音が聞こえてきた。私が大好きだといったモーツァルトを佳子が弾いてくれているのだ。胸に染みいるようなソナタは、仕事不中ずつと聞こえていた。こうして離れていても、二人の心は間違いない通い合っている。私は飛んでいって佳子を抱きしめたい衝動に駆られた。

その後私たちが東京に移り住み、また佳子の方も夫の転勤で関西地方を何年も転々とするようになり、私たちはめつたに会えなくなった。私の留守中に佳子が上京してきて妻と食事をしたたりすることが年に一、二度あるかないかという何年かが続いた後に、佳子は我孫子に戻り、またその何年か後に、妻が突然交通事故で急死した。

その夜、佳子は、家で執り行う通夜と翌朝の葬儀に出席するということで、ホテルを取って我孫子から出てきたのだが、通夜の儀式が済んでもホテルには戻らず、夜通しずっと妻の亡き骸に寄り添ってくれた。

佳子は、棺の小窓を開けて妻の死に顔を眺めては涙にくれながら「姿子さんは正直で、大らかで飾らない人。心置きなく話が出来る人でした」などと亡き妻の思い出を語った。

十二時を過ぎるとさすがに眠気に襲われ、私は妻の棺の前で横になった。佳子がそつと毛布をかけてくれる。彼女の手が毛布越しに私の肩を抱いたように思えて、感極まった私はまだ喪服を着ている佳子を抱きしめ、接吻をした。私には一気に突き進む用意ができていたが、佳子

はそれ以上のことは「いけません。姿子さんの罰が当たるわ」と言つて頑なに拒んだ。

こともあろうに妻の棺の前である。拒むのはもつともではあるが、私は佳子の見せた常識に落胆した。妻の霊前で佳子と契りたかつたのだ。それが妻に対する私の正直な心の証であり、妻もきつとその成り行きを喜んでくれたに違いないと信じていたのだが…。

「柏のお蕎麦屋さんに行ったのは、今頃の季節でしたね」

「そうそう。変わり蕎麦では桜切りが美味しかった」

「ねえ、これから柏にいきませんか？」

「これから？」

「ええ。今夜はそのまま我孫子に泊まってください。」

「…」

そう言い放つた佳子の目の中に、かすかな炎が揺らめいている。

夫が重病だと聞いて、私の心の中に佳子と二人で暮らす幸せな夢が芽生えていたのは事実だ。佳子はすでに還暦を過ぎている。私ももう古希を二年も上回っている。二人とも残り時間はさして多くはないのだ。今も美しい彼女の白い肌を愛撫する機会が三十五年の時を経てやっと近づいてきたことを、心の中でひそかに喜んでいた私だが、今日の今日、我孫子に泊まることは、思つても見なかつたことだった。

「蕎麦は食べたい。我孫子も懐かしい。どうしようかな…」

迷っている振りをしているのではない。私の心の中には、夫の入院中に留守宅でその妻を抱くことは人の倫に悖るといふ思い、通夜の夜に佳子と同じ常識が、勃然として湧き上がっていたのだ。

「まあ、とにかく柏までいきましようか」

柏までは表参道から千代田線に乗って五十分ほどである。私たちは、まだラッシュアワー前の空いている電車に並んで腰掛けた。

曲がったりブレーキをかけたたりするたびに電車が大きく揺れて、佳子の太腿が私の太腿に触れてくる。私はそれを太腿で押し返す。衣類の薄い布地越しに佳子の温もりが伝わってくる。

佳子もそれを感じているだろう。柏が近づくに連れて、私は自分が平常心ではなくなっていくのを感じていた。

やがて二人は柏の古風な蕎麦屋の個室で、運ばれてきた「桜切り」に箸をつけていた。

「夢のように時が流れてしまったね」

「うん。いろんなことを思い出すなあ。あの二人三脚…回覧板…、モーツァルト…」

気持ちの高ぶりを抑えきれず、私は佳子の肩を抱き寄せて唇を奪った。身体の力がぬけた佳子の口から、熱い溜息とともに仄かな花の匂いが立ちのぼった。

「チャンスのの神様って知ってる？」

そのなじみの美容師は、郁ににそう聞いた。これは、昨日行つた美容室でのことだ。そこで、郁は初めてチャンスのの神様という存在を知つた。その美容師曰く、その神様とやらは、若い男性で前髪しかなく、後頭部はつるんと禿げてているそうだ。だから、神様を捕まえるには、彼が前からやつてきたときに前髪を掴むしかなく、過ぎ去つたあとには、もう手遅れなのだと言う。

静かな土曜日の朝、郁はベッドの上で横になりながら、天井を見上げていた。予定もなく、いつもなら昼近くまで熟睡している彼女だが、今朝は目をつぶつても、眠りに戻れなかつた。

眠れない理由はわかつている。それは、一週間前に、恋人の永井久ひさにプロポーズをされたからだ。福井県へ転勤になつたから、ついてきてほしいと。

彼女の名前は、小島郁。歳は二十八で、トイレタリー用品を扱う会社の商品企画部に勤めている。地元大阪ではそこそこの名の知れた企業で、大学卒業と同時に働き始め、もう6年になる。商品企画部は、会社の花形と言われ、そこにまるまる6年間所属してきた郁は、それなりに信頼を得ながら、仕事をこなしている。有り難いことに、仲間にも恵まれ、仕事にもやりがいを感じているが、ここ数年、責任と重圧が年々増えていくことへの戸惑いもあつた。

そこに久からの突然のプロポーズ。久とは、大学時代からの付き合いで、かれこれ交際期間が7年以上だ。突然とはいえ、年齢や、長い交際を考えれば、結婚の話が出るのは時間の問題というタイミングだった。

プロポーズ自体は嬉しかった。女性冥利に尽きる。でも、そのあとの福井に来てほしいという言葉にひっかかってしまって、すぐにイエスと返事をするのができなかった。

結婚するなら久だと思っていたから、ずっとここまで交際してきたのだ。しかし、結婚と福井行きが重なり、突然、結婚と仕事が天秤にかけられることになってしまった。

郁にとつて、結婚はあくまでも今の生活に追加されるオプションのようなもので、それと引き換えに何かを失うという考えはなかった。実際、郁の職場で寿退社なんて言葉は死語に近く、結婚してもみんな当たり前のように働き続けていた。このところ感じ始めていた責任や重圧から解放されるのは魅力的だ。でも、それだけで今の仕事を手放すのは、急にもつたいない気がして仕方なかった。

美容室での話を信じるなら、結婚をとるか仕事をとるか、一体どちらの答えが、チャンスの神様の前髪を掴めるというのか。

この1週間、ずっとプロポーズの返事に悩んでいる。何をしても、どうしても考えてしま。せめて気分を変えようと、郁は起き上がり、冷蔵庫を開けた。冷蔵庫には、アイスティーがあった。それを、グラスに注ぎ、氷を入れ、ぐいっと一口飲んだ。

そのとき、携帯電話が鳴った。着信の相手は久だった。この1週間、久とは当たり障りのないメールのやりとりだけで、直接話したことはなかった。久は、郁がすぐに返事をしなかったことをどう思っているのだろうか。あのプロポーズの日、郁の戸惑いを久は察したのだろう。返事を急かすことなく、そういうことだから考えてと彼は言った。

郁は気まずさが伝わらないように、深呼吸をしてから、電話に出た。

「もしもし？」

「あつ郁？今、どこにいる？」電話口からは、普段と変わらない久の声が聞こえた。

「家だけだ。どうしたの？」

「良かった。今日と明日、特に予定ないって言ってたよね？」

「・・・うん、ないけど。」

「今、郁の家に車で向かってるんだ。ちょっと付き合っしてほしいところがあつて。一泊分の用意して出かける準備していてよ。あと20分くらいで着く。ごめん、もうすぐ信号が変わるから一旦切るよ。またあとで。」

そういつて、一方的に電話は切られてしまった。郁は急の出来事に、あつさりプロポーズ云々は忘れて、慌てて目先の準備にとりかかった。顔を洗い、服を着替え、髪を梳かし、下着や洋服を鞆に詰め込んだ。

そのとき、再び久から電話が鳴った。郁は咄嗟に電話に出て、間髪を入れずに「あと10分



「待って！」と叫んだ。電話からは、久のくすくす笑う声が聞こえ、「さつきは突然ごめん。今、家の下に着いた。コーヒーでも飲んで待つてるから、ゆっくり時間使って。」と穏やかな口調で応えが返ってきた。

二人の車は、北陸自動車道を走っていた。久が転勤先を下見に行くのに、郁を誘ったということらしい。いつも通り、何事もなかったかのように会話を交わしてはいるが、お互いどこか上の空だった。ふと間が空いたとき久がおもむろに口を開いた。

「悩んでるんだろ、結婚のこと。」

郁は驚いて、久の横顔をまじまじと見た。そして、隠してもしようがないと半ば観念して、なんとか声を絞り出した。

「うん。」

「俺とじゃ嫌？」

「そうじゃない、それは絶対じゃないよ。結婚するのは久がいい。でなかったら、こんなに長く付き合っていない。悩んでるのは、仕事のこと。おかしいよね、最近は仕事の愚痴ばかり言っていたのに。でも、いざ辞めることを考えてたら、なんだかもつたいなくなっちゃって。」

久はしばらく真顔だったが、少しホツとしたように言った。

「良かった、俺とじゃ嫌って言われたら致命的だと思ってた。悩んで当然だと思う。全部俺の

タイミングの話だもんな・・・ちよつと寄り道していい？」

そう言うと、久は高速を降りた。看板には福井ではなく、鯖江と書いてあった。インターチェンジを降りてから、10分ほど走ったところで、久は車を停めた。目の前には、石田縞手織りセンターと記された建物があった。

久に車を降りるように促され、郁は、その建物へ躊躇なく入っていく久の後ろ姿を追った。中には、この地で栄え、名産となった石田縞という縞織物の歴史や、職人達の手によって、実際に織られたものが飾ってあった。

郁は、ここへ来た久の意図がよく分からなかったが、それでも石田縞という初めて見る織物を美しいと思った。「綺麗だね。」と郁が言うと、久が静かに話し始めた。

「この布っていうのはさ、元をたどれば縦糸と横糸からなる二本の糸だ。でも、それぞれはただの糸でも、織り上がる世界は無限になる。この縞模様っていうのは、縦糸と横糸が均一に引つ張られて綺麗に出来上がるんだ。どちらかが強くても弱くても駄目。俺たちはさ、この縦糸と横糸みたいなものだと思う。だからさ、お互い我慢せず、何でも思っていることを言い合える関係でいたいんだ。」

そこまで言うと、久は郁の方に振り向き、少し間をあけてから言葉が続けた。

「さっきの仕事先のことだけど、いいよ、辞めなくても。でも、俺は結婚だけはしたいと思ってる。すぐに一緒に暮らせなくても。」

「一緒に住めないのに結婚するの？」

「一緒じゃないから尚更なんだ。結婚しないと俺たちは他人のままだからな。今は、お互い近くにいるからいいけど、離れたら、何かあったときに連絡がとれないこともあるかもしれない。でも、夫と妻だったら、もしお前に何かあっても必ず誰かが連絡をくれる。だから、籍だけは入れておきたいんだ。」

久の言葉に、そして、考え方に触れ、郁は自分のモヤモヤしていた気持ちがすーっと晴れ渡っていくのがわかった。

「もっと早くに相談すれば良かった。」そう言うと、郁は改めて久を見つめた。さらに郁が言葉が続けようとしたとき、久は手でちよつと待つてと制止し、一人で受付の方へ向かい、何か受付の女性とやりとりをしたあと、郁の元に戻ってきた。

「続きはここを出てからにしよう。」来たときと同じように、久は郁に背中を向けて歩き出し、郁はそれを再び追いかけた。

ドンッ

入り口付近で、郁は何かにぶつかり、よろけた。ところが、周りを見渡しても何もなかった。郁は確信した。

(今、目の前にチャンスの神様がいる。)

先に、建物の外で待っていた久が、よろけた郁に気づき、「大丈夫か」と手を差し出した。

郁は、神様の前髪を引っ張るかのように、差し出された久の大きな手をぐいっと引っ張り、言った。

「私、福井で奥さんになるよ。」

二人は、再び車を走らせ、下道で福井市内に向かっている。さつきと同じようにたわいない会話をしているが、二人の間に流れる空気は明らかに違っていた。

赤信号で、久が郁に何かを手渡した。それは、石田縞の織物でできたキーホルダーだった。

「それ、新居の鍵につけるってどう？」「さつきの受付で？私が、断つてたらどうするつもりだったのよ？」「そしたら、こっそり自分で使ってたよ。」と久はほにかんだ。

郁は意地悪だとは思いつつ、思い切つて聞いた。

「ねえ、さつきの石田縞の話、いつ思いついたの？」

「・・・そういうのは、聞かないもんだろ。」

「だって、なんでも思つてることを言い合いたいって言ったのは久じゃない。」

車内には二人の笑い声が響き渡った。

五世紀の終わり頃、夜叉ヶ岳の奥深くを源流とする日野川の流れは『その日』も清冽さを極めていた。

びゅるびゅると岩を擦る流れが日野山の西を過ぎ、爽やかな東風の誘惑に耐え、泰然と雪化粧する白山を遙かに望むと、急に視界が開け武生から鱒江の平野が忽然と現れる。

やがて日野川は、滋賀から栃ノ木峠を経て越後に至る交通の要衝、北国街道と交差する。ここはお舟津さん（舟津神社）に近く、弥生時代から海外交易の中継地である沢江（鱒江）の渡しがあり、関西と中国大陸を結ぶ国際交易港、敦賀・三国の中間に位置する。目を東に移すと三里山に至る広大な湿原に太陽の光が反射して煌めく泉が点在している。

この一帯は、海の道『対馬海流』沿いにある地の利と豊かな自然、そして自然がもたらす名水によって、縄文・弥生・古墳と時代を経ても変わらずそこに住む人々を育み、生命を子孫に引き継ぐ恰好の地となっていた。

有史以来、この日いずる東の果ての列島は、戦乱の中国大陸や朝鮮半島から逃れ、安住の地を求めて何次にも渡る様々な民族の渡来も多く、豊饒な自然は先住民に対してと同様、彼らにもその恵みを分け隔てなく与え続けている。

その結果、縄文時代は十万人であったこの列島の人口は、古墳時代三百万人に達していた。しかし反面、この越（コシ）の地でも人間は闘争を厭わず、時の趨勢により民族の盛衰を繰り返していた。

マノは、白山を遠景に『丹生が嶽』の頂上から見る広大なパノラマがことのほか好きだった。仕事の手を休め三里彼方に見える沢江の泉は、寶石箱のように輝き何時も彼女を癒した。

マノはあどけなさの残る柔和な表情とは裏腹に、情熱的な瞳の奥に炎を宿す類い稀な美貌の持ち主だったが、運命はマノを幸せな境遇には置かなかつた。

古い時代、中国の越（エツ）から渡来したマノの部族は、稲作をこの列島にもたらし、縄文の民とも平和裏に暮らしてきたが、今は弥生時代以降に渡来した技術に長けた部族が支配的地位にあった。

マノが属する一族の人々は聡明な彼女を密かに『姫』と呼び、抑圧された日常からの脱却を渴望するあまり、族長の血筋とはいえ、同じ隷属的身分の彼女に対して、微かなしかし過剰な希望を託した。華麗な容姿に相応しくないマノの憂いは、このことが起因していたが、皮肉にもその憂いの表情が一層マノの存在を際立たせていた。

モトリは支配部族の若き長（おさ）としてこの一帯を統治していたが、現在は丹生が嶽を中心に採れる辰砂から水銀を精製し、大和（関西）方面に出荷する仕事に追われていた。

モトリは監督中見掛けるマノが、次第に彼の心を占めるようになっていくことに戸惑いながらも気づいていた。辰砂を掘りだすマノの白いしなやかな指と、辰砂の鮮紅が映る漆黒の大きな瞳、そして何よりも他者に対する彼女の限らない優しさは、部族を越えて人の心を動かした。マノはモトリがシラキ一族の若き後継者であり、越一族を奴隷の如く扱う当事者として密かに憎んでいたが、言葉を交わすこともなく、時折垣間見る程度のもつりに、颯爽としてはいても、自分と同質の孤独を覗いていた。

或る日。

「マノという娘は居るか。次の荷駄隊に加わり、沢江の渡しまで同行するように」

モトリの側近はそう告げると、何事もなかったかのようにその場を離れた。

マノはモトリの指示だと直感し、激しく動揺した。しかし次の瞬間心騒いだ自分を一族のためには恥じた。

荷駄隊は月一回、水銀をはじめとする越の国の物資を、交易品として遠くは中国大陸・朝鮮半島、国内には大和を中心とした各地へ送るため、こしのみちのくち（武生）から集結地の沢江の渡しまで運び、帰途は海外・国内の交易品を積んだ。

人々で賑わう沢江では、貴重な海外からの交易品や国内の産物等が所狭しと並び、さながら

国際市の様相を呈していた。

通常、重要さゆえに荷駄隊はシラキ一族が占めていたが、今回初めて越一族のマノが加わった。一族の者からは男勝りの勇気を讃えられてはいたが、さすがのマノも居心地の悪さを感じ、隊列の最後方から存在を消すように歩いていた。

その時、白馬が土煙と共にマノめがけ一直線に駆け寄ってきた。

「今日は有難う。これを・・・」

馬上の青年は一言を残し、につこり微笑むと最前列の方に走り去った。

マノは呆然としたものの、手は咄嗟に動き、小さな包みを素早く袂に入れた。その後、彼女の命が尽きるまで、モトリの精悍な表情と微笑んだ口元から覗いた白い歯の鮮烈な印象がマノの記憶に残り続けた。

長い一日が終わり、漸く家に帰り着いたマノは小包を開けた。そこには字が隙間なく書かれた木片と、マノが過って見たこともない真紅の地に緑が散りばめられた宝石が入っていた。

マノは両手で愛おしむように漢字がびっしり書かれた木片を押し抱き、モトリの便りを読み始めた。一族への自責が胸を過ったが、言い知れずときめく予感に手の震えが止まらなかつた。

『マノ様 漸く私の想いを貴女に告げることができません 私には貴女を妻にしたい しかし互い



の一族は決してそれを許しません 二人で大和の国に行きましよう 何千年も前から、この東の果ての列島に多くの民族が渡来しましたが、この美しい大地は血で汚され続け、未だに民族の融和は実現していません 私は渡来し辛苦を嘗めた先祖のためにも、貴女とこの列島で平和を愛する新しい民族を創りたい そのために私は今のすべてを捨てる覚悟です それ程、貴女の存在全てが、私の存在になって終わりました

もう今は何も怖くありません ほんとうに心は平静です 幸い大和の国は異民族間の結婚に寛容です 七日後、私は所用で敦賀に行きます そのまま貴女と大和に向かう帰りのない旅になります 熟慮して決めてください

待ち合わせ場所は、沢江の渡しから東へ少し行った小浚江（こさらえ）の泉にしましょう 朝日が三里山から昇る頃逢い、一緒に清水を飲み前途の幸福を誓いましょう もし貴女が来られなくても問題ありません 父の後を継ぎ父の決めた結婚をするだけです 私の気持ちを斟酌する必要はありません

最後に、同封の宝石は勾玉（まがたま）といます 私が交易品の中から貴女に似合うものを選びました 吉兆の赤と大地の緑、そして貴女の安産祈願が籠っています 私は貴女と二人、民族の恩讐を超えて住民が尊重しあう、差別のない世の一步を踏み出そうと思います モトリ

マノの頬をとめどなく涙が伝った。しかし、この時からマノの真の喜びと同時に新たな苦悩

がはじまった。

七日後、マノとモトリが無事逢えたか判らない。『その日』朝鮮半島から強力な鉄製武器を使う民族「漆黒の軍団」が襲来し、越の国を席卷したからだ。

この大事変でほとんどの伝承は途切れてしまったが、白馬に跨り頬に辰砂を塗った若武者が縦横無尽に闘っていたことが伝わっている。

同時刻、沢江の渡しの傍で妙齡の美女が地元の部族に捕まったが、シラキ族を名乗り殺された。彼女の首飾りには赤と緑に彩られた奇妙な形の石が掛けられ、大事そうに両手で包むように息絶えたという。

三十年後、越の国出身の継体天皇が即位した。彼はシラキ族や越族を差別せずこの列島の統一を成し遂げた。

仄かに伝え聞くところでは、沢江の渡しに架けた橋を「白鬼女橋」と名付け、祠を立てて丁重に供養したという。

また越の国に下る度、継体天皇はしばしば小湊江の泉に出かけ、誰かを待つように、じっと座っていたとも言い伝えられている。

あるところ小さな都がありました。町の中心を走る大通りには、人々や荷車がせわしなく行き来し小さくとも町は賑わい、活気に溢れておりました。その大通りの一番奥に大きく構えるお屋敷がありました。そこにはこの都の主様（ぬしさま）が住んでおられましたそして主様、奥方様の間にはそれは美しい姫様がおられました。名前をこう姫といいました。こう姫は美しいだけでなく琴や舞も、みなうっとりするほどに見事なものでした。

しかしたった一つ、心配事がありました。それはこう姫は口が利けないということですから都中いや、よその国の医者という医者と呼ばせても無駄となり両親を一層悲しませることになりました。しかし本人は悲しいことではあるがこれも運命と思いい心静かに過ごしておりました。そのぶん習い事には一層の励みを重ね、特に読み書きは声に出せない分、溢れ出る感情を次々と筆で表そうと、常に筆と墨壺と紙は侍女が持ち備えておりました。

また、時折屋敷の外に出る牛車での散歩はこう姫にとつての楽しみの一つでした。ある晴れた春の日、こう姫はしびれを切らしたように両親に筆で伝えました。

「ようやくの日和です。一人で外を眺めたくございます。お出かけしてかまいませんか」

両親は一人では心配だと反対しましたが、姫は両手を使つて宥めるような仕草で二人を説得し

たのでした。

姫にとって、お供は付いてはいるものの一人での外出は初めてのことでした。少し不安を抱きながらも年頃の娘の好奇心は張り裂けんばかりでありました。

姫様が乗る牛車は、遠く越前の国の越前漆器で漆黒の輝きを放ち花鳥風月の蒔絵が見事に施されておりました。ですから町なかをこのお車が通るとみな主様の車とわかり、かしくも道をあけるのでした。

書き物一式持った姫は、胸を躍らせながら車の簾越しに見える景色や、人々の営みを感情のままに文字にして表しておりました。

「通りには桜の木はないけれど、どこからか桜の花びらがちらほら舞って、急ぎ歩く商人の肩におりてきました。それを見ていた幼き和子が母に手をひかれながらも指さし笑う。なんと愛らしいことでしょう。」

姫はどんどん車を先に進めました。一人で出かける喜びでいっぱいのは姫はふと海を見たいと思いました。渋る侍女を抑えて車を急がせました。海に来るのは、随分久しぶりで遠く車から眺めただけでしたので姫は胸が一層高鳴りました。

浜まで来ると姫は車を止めさせ慌てる侍女を尻目に筆を持って外に出ました。

まだ少し冷たい海風を仰ぎながら、姫は海に向かって歩き出しました。歩くたびに砂に足をとられながらも、姫にとって初めての経験でしたので楽しくて心が弾みました。波は静かに寄せ

ては引き、お日様の光でてらてら輝いて姫を眩しくさせておりました。

「海とはなんと美しいのでしょうか。この輝きに包まれていると、私の身体など一片の小枝のよう……」

書くことも忘れてしまう程、姫の心は高鳴っておりました。姫は舞うように海際まで走つて来ると足袋越しの水の冷たさに驚きましたがそれもうれしくてついつい濡れた着物も気にせず海の中に歩み入ってゆきました。

その時突然、一人の若者が海に飛び込んで参りました。そしてもの凄い勢いで

「何しとるんじゃ、死ぬ気か」

と言いながら、姫を抱えて浜に戻りました。

驚いた姫はあゝと声にならない悲鳴をあげましたが、気が付いた時には若者に抱えられておりました。傍で侍女が座り込んで泣きじゃくっておりました。

咄嗟の行動だったのか若者自身も驚き慌てて姫を砂の上に下しました。そして身分の違いに気づくと慌てて土下座をしました。

「申し訳ねえです。まさか姫様のような方が……この海はすぐに底が深こうなっております。

入ればすぐに足がとられて危のうございます。だもんでおいら慌ててしもうて」  
若者は必至で頭を砂に擦りつけて謝りました

頭の中が真っ白になってただ座っている姫の傍らで侍女が膝をついて言いました。

「危ないところを助けていただきありがとうございます。この方は主様が娘こう姫様と申します。今日初めてお一人でお屋敷の外に出られ、ここまで来てしまいました。」

と若者にお礼を言いました。若者は「とんでもねえ」と言いつつも頭は砂に突っ込んだままです。それを見た姫は、ようやく状況が読み込めると若者ににじり寄り、若者の肩を叩いて顔を上げさせました。そして「驚かせてごめんなさい。」の気持ちで両手を合わせました。それを見た若者は驚きながらも姫の気持ちが通じたのか顔を赤く染めて、「とんでもねえです。」とまた頭を下げました。

こう姫は思い出したように、くしゃくしゃになった紙に筆を走らせました。

「私は声を持ち合わせておりません。ですから驚かないでくださいな。ただこの大きな美しい海にたい心躍ってしまいました。」

こう書かれた紙を若者に優しく差し出しました。それを読んだ若者もまた「とんでもねえです」と優しく微笑んで返しました。

「姫様、お着物も濡れてしまつて風邪でもひいたら大変でございます。早うお屋敷にお戻りくださりませ主様も心配してございます。」

侍女は急ぎ姫の手をひいて牛車に向かいました。姫は黙つてそれに従いましたが、別れ際に若者の着物の袖を揺らし、こちらを向かせて、感謝の気持ちで優しく微笑みました。

こう姫は案の定風邪をひいて寢床に就いてしまいました。そしてあの海での事を思い浮かべ

ておりました。姫を抱きかかえてくれたあの力強い腕の若者の事を思うと胸が締め付けられそうに辛く、寝床から出られなくなってしまうました。

そして風邪はもうとつくに治っているはずなのにまだ寝床に就いている姫を心配して、主様は医者を責め立てました。が、詳しい事情を聞いていた奥方様はくすりと微笑んで言いました。「もしやその若者に心魅かれたのではないでしょうか、こうも年頃ですもの。」

主様は考えた末、その若者を屋敷に呼ぶことにしました。それを聞いた途端姫は目を輝かせ、うれしい気持ち露出了しました。

「ただしそれで終わりにするのだぞ。それ以上のことは望んではならんぞ。」  
主様は姫の心に釘を刺しました。身分の違い過ぎることで線引きをさせたのでした。

若者はすぐに見つかり屋敷に呼ばれました

名前は太郎といい、漁師で海辺の近くで一人暮らしておりました。目鼻筋の通った気持ちの良いい若者でした。主様はお礼に褒美をと言いましたが、太郎は勘違いをした自分が悪いと言って丁重に断りました。

簾越しにいた姫はもつと太郎と話がしたくて父上に哀願しました。主様は仕方なく褒美の代わりということで侍女を介して二人で話をさせてやりました。

姫は侍女に簾を上げさせると高鳴る気持ちを抑えつつ太郎の前に寄りました。そして驚き伏せる太郎に姫は筆を走らせました。

「またお会いできてうれしゅうございます。」

あの美しい海のもとで、暮らしていける太郎様が、羨ましゅうございます。」

と差し出しました。それを読んだ太郎は心が和んだのか、顔を少し上げ優しく言いました

「海はおらの家族です。時々波を荒立て怒る時もありますが、優しく包み込んでくれる時はおらの心も落ち着きます。」

それを聞いた姫は増々太郎に惹かれて、

「すぐに言葉に出せないのが口惜しいです。

あなたともっとお話ししとうございます。」

さらりと書き、楽しそうにその紙を見せました。太郎も胸を熱くしながらも自然体を装い

「もつたいのうございます。おらはただ海や自然と共に生きてるだけでございます。」

自然体で遅しく見える太郎に姫が思わず、

「私には、そのような暮らしはできないのでしょうか。」涙目で差し出す姫に、太郎は返す言

葉を失い、沈黙の中二人の間に何か熱いものが流れました。そして太郎は優しく微笑み黙って頭を下げ、それを答えとしました。

それを見た姫も無言で肩を落としました。

太郎は帰り際に持参した黒塗りの箱を主様に差し出して言いました。

「これは玉手箱といまして、おらの曾爺様からの譲り物でございます。言い伝えによるとこ



の箱をひとたび開ければ煙が出てきて、その煙を身体の悪い所にかざしますと、たちまち治つちまうと云うのです。嘘か真か姫様にお役に立てましたらと思ひまして」。

そう言い残して太郎は帰つて行きました。

主様は半信半疑で受け取つた玉手箱を悩んだ末、太郎を信じてやってみることにしました。姫の前で玉手箱を開けると、何も無い中からやがて白い煙が出てきました。それを恐る恐る姫の口にかざしました。すると少し咳込んだものの姫の口から「ああ」と小さく声が洩れました。そして

「私、声が出せるの？」

その声を聞いた主様や奥方様、周りの皆も歡喜の涙を流して喜びました。

それから都中、三日三晩お祝いが続きました

姫は太郎にお礼が言いたくて声を聞かせたくて都中を捜しました。しかし太郎は二度と見つかりませんでした。

太郎はその玉手箱にもう一つの言い伝えがあることを言いませんでした。その箱を一度開けると悪い所が治せる代わりに、持ち主の太郎はあつという間にしわだらけのお爺さんになつてしまふと云うことを・・

それでも太郎は幸せでした。あの時、海辺でこう姫が書いた紙を大事に胸にしまい、時折読みながら静かに微笑むのでした。

「お母さん、私、ちょっと出かけてくる。今日の夜には帰ってくるから。」

「え？どこ行くの？」

「福井」

新幹線のなか、私は今朝のことを思い出してひとり笑っていた。あの母の顔といたら。開いた口がふさがらないとはまさにあの表情のことだ。そのあとはもう質問攻めだった。「どうしてそんなところに行くの」「なにかあつたらどうするの」……そんな母の質問が終わらないうちに、私はトランクを引いて外に飛び出した。とんだ不良娘だ。だけど私ももう十六歳。日帰りなのだし、必要経費、移動経路、その他諸々をまとめた一覧を家に置いてきたのだけで勘弁してもらえるといいのだけど。

だいたい今日は無計画で家を飛び出してきたわけではない。リュックサックからクリアファイルを出した。すべてはこのためだ。ひとつ、一番上にあつたものを取り出す。水色の、シンプルだけどちよつと洒落た便箋。少し角ばつた字で書かれた、「篠田ハル様」の文字。その差出人の部分をそつと撫でた。

「福井県鯖江市……高宮昇」

私が昴君と文通を始めたのは、高校一年生の五月。ちょうど一年前のこのぐらいの時期だ。そしてそれは同時に、私が学校に行けなくなった頃でもある。高校受験に失敗して引きこもった私に、母が少しでも心の支えになればなんて申し込んで始まった文通だったが私はすぐその虜になった。その理由は何といつても、昴君の人柄だ。いつもすぐ返事をくれて、私のくだらない話にもちゃんとこたえてくれるところ。私が「花が好き」と言ったら、毎回近くで撮ったという花や自然の写真を手紙にいられてくれるようになった、やさしいところ。そして何より、私が学校に行っていない、という告白にも「ハルががんばってることはわかってる。だからハルは焦らずに、自分のペースでやっていけば大丈夫。」と言ってくれたこと。それは今まで「怠けている」だの「心が弱い」だの散々言われ続けた私にとって、まさに希望のようなものだった。そしてそれから昴君からの手紙は私の宝物になった。そしてちょうど先週のこと、いつものように手紙を受け取った私が見たのは、満開の桜の花の写真だった。

「西山公園というところで去年撮った写真です。きっとこの手紙が着くころには、満開だと思うよ。」

それを見た瞬間、私はこの小旅行を思い立ったのだ。本当に衝動的で、だけどとても強い思いだった。昴君に会いたい。一緒に桜を見たい、と。

その旨を急いで手紙に書いて投函し、私は彼の住む福井県鯖江市へ行くことに決めた。何より急がなければならなかった。早くしないと、満開の桜が見られなくなってしまふ。

いつも優柔不断な私にとつて、こんなに何かをしたいと突き動かされたことははじめてだった。もちろん不安がないといったら嘘になる。昴君とはまだ知り合つて一年しかたつてないうえに、顔も知らないのだから。だけど自分の中で膨らんでいくこの底知れない力を試してみたい。大きくなつていくその思いに、私はかけてみようと思つたのだ。

「まもなく、米原、米原」

車内アナウンスが鳴つた。私はまた手紙を丁寧にファイルにしまつて、トランクに入れた。パーカーのチャックをきゅつとあげる。心の中で「よしっ」なんて言つて気持ちを奮い立たせ、私は新幹線を降りた。

その後昴君の住所に近い駅まで電車で乗り継いで改札についた。構内を見渡す。手紙には私の電車時間と服装とを教えて、改札を降りたところで会いたしましょう、と書いたけれど、やっぱりもう少し詳しく説明しておくべきだった。何人もの人がいる中、私は昴君らしき人を探す。同い年で、サッカーをやっている昴君。おしゃれな封筒で筆まめな昴君。優しく、きつとかつこよくて――

「あの…ハル…さんですか？」

背後で声が聞こえた。振り返るとそこには背の高い男子が立っていた。でも彼があつた昴君だなんて到底信じられなかつた。背後の彼は坊主頭でがっちりしていて、薄汚れたタンクトップは

明らかに体に合っていない。しかもなぜか眉は吊り上がっていて、息も荒い。

「昴君？」

言った瞬間、彼の顔が曇った。そして私の腕を握り、走り出した。

「ちよつと、何するんですか！」

私の声にも貸さず彼は早足で進んでいく。駅を出てすぐのバス停にはもうバスが到着していた。彼は私の分までお金を入れると無言で車両の奥の座席に座った。私もその横の席に座り、お金を返そうと財布を開いたがその手はひっこめられてしまった。私の何がそんなに彼を怒らせたのだろう。東京から突然押しかけてくるなんてやっぱり迷惑だっただろうか。たった一年間、手紙でやり取りしただけの立場だ。だけど彼とは、昴君とは、お互い大切な存在になれたと思っていたのだけれど——そんな私の思い上がりだったのかもしれない。通り過ぎていく景色も全く頭に入ってこなかった。

運転手のアナウンスに彼が降車ボタンを押し、私もまた後に続いてバスを降りた。プシュー……あつという間にバスは遠くまで行って、やがて見えなくなってしまう。

小さくため息をついたその時、彼がいきなり振り返った。私は反射的に目を閉じる。

「なにやってるんですか！」

彼は私の手を放すといきなり大声を出した。

「もし俺が危ない人だったら、どうするつもりだったんですか？若い女の子が顔も知らない相

手と会うなんて、もっとよく考えないと……！」

予想外の言葉に私は呆然と立ち尽くした。彼が続ける。

「大体手紙が着いたの昨日なんですよ。突然来るなんて知って、もうびっくりして……え、泣いてますか？」

気づいたら頬に涙が伝っていた。私も自分自身に驚いたけれど、彼の慌てぶりといったら。あの手紙の冷静で寛容な昴君はどこへいったのやら、涙を流す私にただおろおろしている。

「あの、別に、怒っているわけではなくて……ただハルさんが心配で……」  
なみだを袖で拭うと私は顔を上げた。

「……違う。私、嬉しかったんだよ。やっぱり昴君は、思ってた通りの人だった。」

「……はあ」

きよとんとする昴君を抜かして前に立つ。

「桜、案内してください。」

「本当に反省してますか？」

昴君は困ったみたいに笑った。その顔がさっきまでの表情とは対照的にとても優しく、わたしもつられて笑った。

「名前、手紙みたいにハルって呼んでよ。」

昴君はちよっと赤くなって、顔をそむけて言った。

「……桜まで走るぞ、ハル」

西山公園に着いたときからも桜が見えていた。あの写真の桜もすてきだったけど、実際はその何倍も美しかった。写真だけではわからなかったことばかりだ。例えば間から覗く日差しが桜をより鮮やかに染めていたり、風で舞う花びらだったり。それだけで今までの苦勞も吹き飛んだ。

「気に入ってくれた？」

隣で昴君が言った。

「うん。こんなにきれいだとは思わなかった。よかった、見に来て。髪をなびかせる風が気持ちいい。」

「正直に言うると私の想像の昴君と本当ちよつと違った。」

「がっかりした？こんなので」

昴君は少し顔を伏せて笑った。

「最初はびつくりした。でも今はどつちの昴君もいい人だなんて思う。」

「いい人、か。」

頭をかくと彼は歩きはじめた。

「俺だって、ハルは儂げな薄幸の美少女って感じだと思ってたよ。」

少し拗ねたような声だ。

「悪かったですね、美少女じゃなくて。」

後ろ姿で昴君も笑っているのが分かった。

大きな背中を見つめる。この人があんな洒落た手紙を書くなんて思うとやはり信じ難くて笑みがこぼれた。花びらがちよこんと肩に乗っている。とってあげようと思ってもなぜか手足が動かなかった。桜のアーチの中を歩く昴君と私。昴君は想像してた王子様ではないし、私も薄幸の美少女なんかではないけど。だけどここの風景のなかでは私達はただの二人の人間で、そしてそれは他の何よりも確かで大事なことのような気さえした。

「学校行ってみようかな」

今までどうしても言えなかったその言葉がなぜかすんなりと言えた。

昴君が振り向いた。

「どうして？」

「この桜、きれいすぎてなんか色々どうでもよくなっちゃった」

「意味分らないよ」

そう言って二人して笑った。

「そうしたら、またここに桜を見に来てもいい？」

また説教されるかな。迷惑だと言われるかもしれない。そう思うと声が震えた。

「……蛍もみたいんだろ？」



少し間を開けて柔らかい声が聞こえた。蛍、見たことないんです。いつかみてみたいな。確かに私はそう手紙に書いた。でもそれは去年の夏頃で……

「案内するから、今年の夏にまた来ればいい。紅葉もつつじも、ハルが見たいって言ったもの全部見に行こう。」

そう言つて昴君は笑つた。あまりにも無邪気に笑うから、つられて頬が緩んだ。見上げた空が驚くほど青かつた。

「じゃあ、またね。」

福井駅の改札で私は昴君に手を振つた。昴君がうなずいた。私が見えなくなるまで昴君はずつと手を振つてくれた。新幹線が発車すると私はまた水色の封筒を出してもう一度じっくり読み返した。家に着いてしばらくしたら昴君からの手紙が待っている。それよりも母からの説教が先だろうか。それでも私はこれからのことを考えると楽しくて仕方がなかつた。私はまたここに戻つてくる。蛍を、紅葉を、つつじを見るために。昴君に会うために。またね、と私は遠ざかつていく窓の外の景色に小さく手を振つた。

近松の里たちまち

近松の里 たちまち スタンプラリー  
パワースポット + KOIBANAめぐり

※近松の里づくり事業推進会議で作成した冊子を掲載しています。

2013年 近松の恋物語が360年の時を経て現代によみがえる…



近松の里 たちまち スタンプラリー

パワースポット+  
めぐり



近松の里  
たちまち  
スタンプ  
ラリー



## こちろもアキパワー情報

「春を抜き、楽を与える」名号岩

●名号岩 (みょうごういわ)

天神山麓の大岩石には、天保13年(1842)に刻まれた「雨無阿弥陀仏」の名号が深く刻まれています。名号には救苦と楽の働きがあるとされ、通行する人々に唱えさせるものだと言われています。



伊野姫パワーで待ち人来る

●越智神社 (おちじんじや)

奏進大師のその母「伊野姫」が祭神と伝えられている立待小学校の前の小さな社。古く奏進大師が「子供の頃に母親が降り立って待っていた」という伝説から「立待」の名称が生まれたとされています。



近松門左衛門が幼少期を過ごした、「近松の里 たちまち」、古い面影を残す城下町には、かつて栄えた活気ある土地の記憶があります。由緒ある神社には、日々の喧騒を忘れさせる神聖な空気が流れています。豊かな自然や草花には、心身をやさしく癒してくれる力があります。そんな「近松の里 たちまち」は、2013年に近松門左衛門生誕360年を迎え、それにあわせて「さばえ近松文学賞 恋話(KOIBANA)」の募集を始めます。この冊子では、近松ゆかりの歴史と自然があふれる場所と、そこに咲く花に込められた恋話＝恋花メッセージをご紹介します。すべての場所を巡って、時を越えて人を元気にする近松のパワーに触れてください。

【この本の使い方】

近松にゆかりのある  
パワースポットを、写  
真と文章で紹介

訪れた記念に、  
ちかもんくんスタンプ  
を、押しましょう!

それぞれの場所に設置され  
た「近松の里めぐり物語  
BOX」「近松の里めぐりBOX」  
の中に、スタンプや情報誌  
が入っています。



「見どころ」「なんだろう」  
「ひとやすみ」の3つに分  
け、その場所ならではの  
ポイントを紹介

「近松との縁」では、近松  
門左衛門の幼少時代を振  
り返ります

さらに!応募してゲットしよう!

ぐるっと  
まわって  
12  
ポイント  
越前漆器製三科益特製絵馬  
をもらおう!

別紙の応募ハガキに12カ所のスタンプを全部兼ね、必要事項をご記入の上50円切手を貼り郵送してください。後日「近松の里 たちまち パワースポット+恋話めぐり」証明書とちかもんくんグッズを郵送いたします。開題日には、立待公民館・まなべの館でも受け取ることができます。また、Wチャンスとして毎年10月に開催される「たちまち 近松まつり」で抽選会を行い、抽選で「越前漆器特製三科益特製絵馬」をプレゼントいたします。

※詳しくは応募用紙をご覧ください。



恋話＝恋花(KOIBANA)

恋話を題材とした作品が多い近松門左衛門。「近松の里 たちまち」めぐり、各所で見かけた花々にも、昔から伝わる「恋話」や花の名を録んだ「恋歌」が存在します。花言葉と恋話&恋歌を紹介しながら、プチメッセージを届けます。

2013年、近松門左衛門生誕360年『曾根崎心中』初上演310年を記念して

さばえ近松文学賞  
恋話を募集します。

【テーマ】  
近松の恋愛が時を越えて  
現代によみがえる

(400字詰め原稿用紙5枚程度)

map ナンバー

1

# 近松門左衛門記念碑庭園

(近松の里めぐり情報館)

ちかまつもんだえもんきねんていえん



東洋のシェイクスピアと称される近松門左衛門は、鯖江市が誇る劇作家。近松が幼少期を過ごした「立待」をめぐる旅は、ここ杉本町の立待公民館敷地内にある近松門左衛門記念碑庭園から始まります。庭園は、浄瑠璃に欠くことのできない三味線の形をし、初夏になるとサツキの花で彩られます。正面奥に近松の辞世文を記した碑があり、父の吉江藩士・杉森信義と近松が越前を離れるまでの解説が記されています。庭園手前には、福井県出身の作家・水上勉氏揮毫による「近松門左衛門先生由縁之地」と記された石碑も建てられています。



見どころ



近松の里めぐり情報館

立待公民館内にある「近松の里めぐり情報館」では、ただ一人の吉江藩主「松平昌親公」や、元禄三大文豪のひとつ「近松門左衛門」と鯖江との関わりについて紹介しています。文庫の人形や衣装等の展示をはじめ、鯖江市在住の創作粘土人形作家かとうかずお氏による近松と鯖江に関するジオラマ風人形や、映像、展示等があり、子どもから大人まで楽しみながら、近松の幼少時代を振り返ることが出来ます。



七歳で最期の足跡の人形



ここに  
スタンプを  
おしてね！  
+この世初の聖地で！  
物語BOXに  
スタンプが  
入っています。



サツキは「ハンジヨ」  
里が小さくて可愛いです。



サツキ(杜鵑花) 花言葉: 協力を得られる、節約、野制

恋話  
KOI BANA

中国の伝説、蜀の地に天から下った「望帝」という王がいました。その地へ治水に詳しい「べつぎ」がやって来ます。べつぎの留守中、その妻と通じてしまった望帝は自分を恥じ山の中に隠れ、苦悩の糸、死んで杜鵑(ホトトギス)に生まれ変わります。最も優しくも激しく情を燃やした血が地上に落ち、そこから美しい花が咲き、杜鵑花と呼ばれたとされています。

春メッセージ「何事も度を過ぎないよう、控えめに」





水の神(龍)と、生命の再生(蛇)のお話が伝わる

map ナンバー

2

## 西光寺表門

さいこうじおもてもん



全国でも珍しく殿号で呼ばれる寺院「石田殿西光寺」は、本願寺7世・存如が旧石田村に開いた道場を起源とし文禄4年(1595)、現在地に再建されました。表門は、吉江藩主だった松平昌親公が福井藩主を継ぐこととなり、廃藩となった吉江藩邸(館)の門が西光寺に移築されたと伝えられています。薬師門形式の門は寺院としては特異であり、建築様式でも江戸時代中期の特長が認めらることなど、当時の面影を残す希少なものと云えるでしょう。国の有形登録文化財に指定されています。



ここに  
スタンプを  
おしてね!  
そこの世社の壁のてり  
物館80Xに  
スタンプが  
入っています。



? なんだらう

### 「じゃぼんこう」の由来

江戸時代、西光寺に迎えられた第10世・寂周は、生来病弱だったため、乳母「お通」が同行、献身的に世話をします。やがて、病癒の再来とされるほど人々の崇敬を集めた寂周でしたが、徳望が高まるほど健康が気がかりなお通。ついには自分の命を寂周に捧げて欲しいと池に身を沈めます。その年の報恩講は雷雨となり、池から龍(蛇)となったお通が舞い上がったという伝説から「報恩講」が「蛇恩講」、「じゃぼんこう」と言われるようになりました。



近松との縁



### 大イチョウ

西光寺の境内にある推定樹齢400年の大イチョウは、立役の歴史を見守ってきました。秋になると黄金色に輝く木を見上げ、銀杏拾いを楽しんだ幼い近松が思い浮かびます。



ケイトウ「繡藍」(からあい) 花言葉: 色あせぬ恋、情愛、おしゃべり

## 恋話

KOI BANANA

「秋さらば 写もせむとわが蒔きし 繡藍の花を 誰か採みけむ」(与謝蕪村)  
秋に染めようと思って蒔いた繡藍の花が、誰かに摘まれてしまった。繡藍の花は「思い人」を意味しています。

✿メッセージ「時機を見極め、後悔するまえに告白を」



不動明王に見守られて力が湧いてくる

map ナンバー

3

## 糺野お清水

ただずのおしょうず



老杉が生い茂り、清水の湧き出る様子が京都の糺野に似ていることからこの地を「糺」と呼ぶようになりました。糺は鯖江台地の北西に位置し、大地と平地の間から湧くお清水は、神事に使われる名水として古来より大切に扱われてきました。また、野菜や農機具を洗う場所が区別され村人の生活にも欠かせない水でもありました。かつて数カ所あったお清水も、こちらを残すだけとなり年々その水量も減りつつあります。いつの日か、こんこんと湧くお清水に戻したいものです。立待村志には、糺に「糺清水」があったことが記されています。



? なんだらう



**お清水を守る白不動明王**  
糺野お清水に祀られているのは、右手に剣を持ち、左手に鏡を持つ白不動明王。あらゆる「魔」を滅ぼし、幸福を与えらる仏様は、昔も今も糺野お清水の水源を静かに見守り続けます。



近松どの縁



水路脇に隠れるように存在する糺野お清水

清水川から西光寺前を流れる水路脇に、今は一つになってしまった糺野お清水があります。近松の頃は、数カ所のお清水が水量も豊かにこんこんと湧き出ていたそうです。



ここに  
スタンプを  
おしめてね!  
その  
近松の影響でRBOXに  
スタンプが  
入っています。



水際に咲く美しい花。



**パンジー(すみれ)** 花言葉:物思い、私を思ってください、私はあなたを思う、純愛

**恋話**  
LOVE STORY

ヨーロッパでは古くから、愛する人に「天使に愛された花」のいい伝えをもつパンジーの花を贈ります。天使に愛された花が奇縁を起こしてくれそうです。

※メッセージ「素直な気持ちも、花に託してみては」





人と人を繋ぎ、物事をスムーズに運ぶ

map ナンバー

4

## 石田の渡し場跡

いしだのわたしばあと



江戸時代から明治頃まで、水量が豊富な日野川では船を利用して「河川交通」が盛んでした。米やさまざまな物産が船積みされ三国湊まで運ばれました。古い文献によると、この石田にも舟渡し場があったとされ、日野川に交差する「浜街道（越前海岸から吉江に至る街道）」の渡し場として利用されたことが記されています。長さ18m・幅2mほどの渡し舟が一艘あり、石田橋50m下流の大きな柳が船着き場になっていたようです。明治40年代、道路が整備され木製の橋が架かると石田の渡し場も廃止されました。



ひとやすみ



渡し場跡で往時を偲ぶ  
現在、石田の渡し場跡がある日野川の河川敷には、青い芝生が植えられ整備が進んでいます。渡し舟が行き来し、旅人の足となっていた見晴らしのいい渡し場跡を眺め、往跡を偲びましょう。



近松との縁



### 近松と幸若舞を繋いだ石田の渡し

近松作品に大きな影響を与えたとされている「幸若舞」は、越前朝日町を発祥の地とし、能や歌舞伎の原型とされています。近松は、この「幸若舞」を見るため石田の渡しを利用したのでしょうか。現在の石田橋の欄干は、当時をイメージした渡し舟がモチーフになっています。



ここに  
スタンプを  
おしてね！

石田町  
近松の足跡で「BOX」に  
スタンプが  
入っています。



子どもの頃を思い出す  
クローバーの花びら。



クローバー（シロツメクサ）

花言葉「約束、恥を思い出して下さい」

### 恋話

KOI BANA

アイヌの青年が恋人に逢いにくためにのった舟が沈みました。恋人は彼の亡骸を体に結び、沼に身を投げました。翌朝、その周りはクローバーが咲き乱れたそうです。

※メッセージ「約束をおろそかにすると、気持ちはずれ違います」



難関突破! 遠回りしてこそ得られるものがあるはず

map ナンバー

5

# 吉江七曲り通り

よしえななまがりどおり



正保2年(1645年)から29年間、松平昌親公を藩主とする吉江藩がありました。七曲りは吉江藩の城下町の名残りで、町人町の一つ新町から藩主の住む陣屋までの道のりを、七曲りの名の通り何度も屈曲させ大回りさせるという城下町特有の道路構造をしています。当時は、入口には木戸、境に高札場があったと言われています。現在は当時の佇まいを見る事は出来ませんが、変わらない地割りや道路から吉江藩当時の様子を伺い知ることが出来ます。



ひとやすみ



## 古い町並みと桜の木

吉江藩2万5千石の城下町の面影が残る、七曲り通り。一年を通して賑わっていますが、春には桜の花で彩られ、美しい風情を醸します。



近松との縁



## 近松が暮らした城下町

10年余りをこの城下町で暮らした近松。この界隈に足を踏み入れると、幻想的な雰囲気、文化的景観と古民家のすばらしさを堪能できます。当時の力平型の通りが現存し、町屋、商家などが住師を思い起こさせてくれます。



ここに  
スタンプを  
おしめてね!

この  
街の歴史や文化を  
スタンプが  
入っています。



**サクラ 恋話** KOF BANA

花言葉: 純潔、優れた恋人

「あしひきの 山桜花 一目だに 君と見れば 我れ恋ひめやも//大伴家持  
山に咲く桜の花をあなたと一緒に眺められたなら、こんな風に花が恋しいと  
は思わないでしょう...病の床から恋人を思い詠んだ歌です。

※メッセージ「心が通じていても、言葉で伝えることも大事です」



悪夢を良い夢に替えてくれるという歴史ある古いお寺

map ナンバー

## 6 福正寺 ふくしょうじ



吉江藩関係の史跡が数多く残される吉江町周辺。こちらの福正寺もそのひとつで、創建は文治2年(1186)。元は天台宗の寺院でしたが長享2年(1488)に浄土真宗に改宗。戦国時代の戦火を被りながらも寺坊が守られ、松平昌親公が吉江藩邸を建築する際、土地を交換し現在地に寺域を定められました。この時、松平昌親公より多くの材木を寄進されています。長い歴史と人々の祈りに培われた不思議な力が感じられます。



ここに  
スタンプを  
おしてね!  
その  
番札の裏側く/BOXに  
スタンプが  
入っています。



ピンクと白の千日紅  
まるい花がゆらゆら。



### 見どころ



#### 本堂正面軒下に 不思議な雲獣

こちらの木鼻に彫刻されているのは「雲獣」。雲獣は、悪夢を食べてくれたり、悪夢を良い夢に替えてくれたりするそうです。



### 近松との縁



#### 近松が遊んだ 歴史ある古いお寺

近松が、吉江藩士となった父と一緒に移り住んだのは福松君(松平昌親公の幼名)が元服した明暦元年。このとき近松は2歳。このお寺の境内で遊ぶ近松を思い浮かべることができます。



スズラン

恋話  
KOI BANANA

花言葉「幸福、繊細、幸福が戻ってくる、純潔」

春の女神オスタラが、この花の守護神。パリの風習では5月1日にこの花を贈ると幸福が訪れるという、恋人に捧げる花です。

※メッセージ「終わることは、はじまること。一步踏み出しましょう」



「学問の神様」菅原道真と乙千代丸を祀る親子愛パワー

map ナンバー

7

## 西番天満神社

にしぼんでんまんじんじや



ご祭神は、「学問の神様」として知られる菅原道真公。公の第3子である乙千代丸がこの地に住み、公の像を彫ったとされています。その後、落雷により御神像は焼失し、作り直されました。菅原道真公を祭神とする西番天満神社は、近松の父が仕えた吉江藩主・松平昌親公の祈願所でした。立待の里の総鎮守の社でもあり、村人の信仰を集めてきました。後年60歳を越えた近松は、菅原道真の大宰府への配流を題材にした「天神記」という傑作浄瑠璃を書き上げます。



見どころ



### 乙千代丸神社

乙千代丸は、菅原道真公の第3子。父菅原道真が大宰府へ配流になったとき、京都を逃われ、家臣とともに立待地区の杉本の地に辿り着きました。乙千代丸は、神像を削り、父の道真として朝夕拝しました。その像を収めた天宮岩の横に寄り添うように、乙千代丸を祀る神社が建てられています。



近松との縁



### 国性爺合戦の絵馬

近松の代表作のひとつ「国性爺合戦」は時代物の中でもっとも有名な作品。その絵馬が奉納されています。このあたりで一冊大きな絵馬として知られています。



ここに  
スタンプを  
取ってね!  
そのお世評の書場で  
物語BOXに  
スタンプが  
入っています。



### ウメ 恋話

花言葉・高潔な心、潔白、愛んだ心、忠義

「春なればうべも咲きたる梅の花君を思ふと夜寐(よい)も寝なくも」/管城守極氏安麻呂 梅は「君」のこと。恋する人を思うと夜も寝られない...寝れない夜の恋心を詠んでいます。

※メッセージ「強がらずに、会いたい気持ちを素直に表現してみてください」





吉江藩が成立した正保2年(1645)、吉江藩主・松平昌親公は陣屋や町並みを整備。従来の町に新しく整備した町をあわせて「十一口」、これを縦に並べて「吉江」とされ、立待郷吉江町が生まれました。昌親は、この頃から政治家としての手腕をふるい、土地を開墾し新しい農地を開拓したり、鍛冶屋や木綿の織物職人の育成など、商工業に力を注ぎます。結果、吉江は丹生郡の政治経済の中心として隆盛を極め、「小江戸」と呼ばれるほどでした。延宝2年、兄の福井藩主・光通が死去し昌親が福井藩主となるまで、わずか30年足らずでした。



松平昌親公 瑞雲寺蔵

正保2年(1645)、結城秀康の子で第3代福井藩主・松平忠昌が死去。その後を子の松平光通が継ぐ。その時、松平光通は、弟の松平昌親公に2万5千石を分与するが、越前国内各所に分散していたため、まず本拠地の兼堂を行ねねばならなかった。慶安1年(1648)、松平昌親公は母所を吉江に設置することを許可され、吉江藩が成立しました。



近松との縁

近松の父が仕えた吉江藩


立待郷吉江の町が生まれた正保2年、昌親公はまだ6歳でした。その時、養育係となった付き人の中に近松の父である杉森信義の名があります。昌親公が元服したときに、杉森信義も2歳の近松とともに吉江に入ります。



ここに  
スタンプを  
おしえてね！  
※この近松の書簡で1  
冊はBOXに  
スタンプが  
入っています。



石積の傍らに、  
ナadeshikoの花をみつめました。



ナadeshiko  
**恋話**  
KOI BANA

花言葉：純愛、恋慕

「ひさかたの雨は降りしくなでしこが いや初花に 恋しき我が背！/大伴家持  
雨が降り続いても、咲きたてのなでしこのように恋しく思われるあなた…慕  
る恋心を隠んでいます。

※メッセージ「毎日が楽しくなるような、何かに恋してませんか」



「東洋のシェイクスピア」と称される近松を学んで諸芸上達祈願

map ナンバー

9

## 近松門左衛門坐像

ちかもんくんざいもんざそう

(近松情報案内所)



鯖江市には、歴史・伝統・文化を感じるすばらしい地域の宝があります。その中でも全国に誇れるブランド力の高い宝として、江戸時代の文豪(浄瑠璃・歌舞伎作者)近松門左衛門の存在があります。2歳から10年あまりの多感な少年時代を吉江で過ごした近松。その土壌は、越前鯖江の豊かな自然と人情、風情に育まれたと言えるでしょう。浅水川沿いの通りに面した見晴らしのよい場所に、作品を執筆しているかの如く筆を走らせる近松の坐像がどっしりと鎮座しています。

近松門左衛門の坐像が、ここに設置されています。

ここに  
スタンプを  
おしてね!



うつくしき和紙な香雪の花が  
ついでに飾っていました。



ひとやすみ



### 近松情報案内所

近松関連の情報や案内チラシがたっぷり。「近松の里 たちまちめぐり」の情報拠点となる案内所です。無料レンタサイクルも完備しています。

ちかもんくん号に乗って  
散策しよう!



### 無料レンタサイクル

「近松の里」を散策するのに、無料レンタサイクルをご利用ください。

連絡先: 現地にてご確認ください



## ユリ 恋話

KOI BANANA

花言葉: 純潔、誠実、無垢

「さ百合花 ゆりも逢はむと 下庭(は)ふる 心しなくは 今日も経てもよ/大伴家持 百合は「あとで」と置なる言葉、後で逢えと思わないと、今を過ごせない気持ちを表します。

※メッセージ「深呼吸、どちらも大事なら自分のペースを大切に」



信じる人に幸運を招く「三度栗」の不思議な話

map ナンバー

10

## 大谷公園

おおたにこうえん

(実のなる公園)



大谷公園には、親鸞上人の「三度栗縁起」という伝説に由来する3本の栗の木があります。越後に向かう親鸞が、民家で説法をしました。しかし、誰も話を信じなかったため、焼き栗を庭に植え「この実が年に3度実を結んだならば、私の説法に嘘はない」と言い立ち去ります。後に、栗は1年に3度実を成し、「三度栗」と呼ばれました。3本の栗の木は、その子木を移植したもので、「実がなる」が「実る」となり、心願成就のご利益があるとされています。



ここに  
スタンプを  
おしてね!

この  
近松の聖徳寺IBOXに  
スタンプが  
入っています。



今が掛けがらう懸へと...  
お理想的な写真に出会えます。



ひとやすみ



### 実のなる公園

グミ、栗、柿、イチジク等、実のなる樹木を植樹して、四季を通し「育て、収穫し、食する」といった体験学習型公園を目指しています。起伏に富む地形を活かした楽しい空間で、子供たちも自由に遊べます。



近松との縁



### 近松が愛した 立待の風景を眺める

左右の竹林を仰ぎ見ながら石段を登りつめると、見晴らしの良いのどかな立待の町の景色が広がります。うぐいすを始め、いるいな野鳥の声を楽しみながら、近松が愛した城下町に思いを馳せましょう。



リンドウ

## 恋話

KOI BANANA

花言葉:正義、恋している時のあなたが好き、さびしい愛情

平安時代、おしゃれな花とされ、女御たちの衣裳の模様になつて使われました。リンドウが1本で咲く姿から「恋しているあなたを愛する」というやさしい花言葉ができました。

※メッセージ「落ち込んだときは、ひとりの時間も必要です」



まっすぐ伸びる大杉にあやかって成長を祈願

map ナンバー

11

## 春慶寺

しゅんけいじ



寺伝によると、春慶寺の前身は泰澄大師が白山修行に立つ際、立待にあった草庵に名づけた「心敬寺」にあるとされます。戦国時代には、心敬寺を中心に一千坊がひしめいていましたが、織田信長の越前侵攻の焼き討ちに遭い現在の寺院だけが残りました。正保2年(1645)吉江藩成立後、藩主・松平昌親公の篤い信仰のもと、寺号を天台宗「春日山 春慶寺」へと改め、同藩の祈願所に定められました。泰澄大師伝記には、大師が三十八社より越知山へ通う途中、一草庵であった当寺において香や菓を供えて選擇したとあります。寺の西側には、徳川家家紋の原型になった「二葉葵」が植えられています。



ここに  
スタンプを  
おしてね！  
その  
お礼の景観で「おX」に  
スタンプが  
入っています。



大きな梅の実は、  
毎年見事な花を咲かせます。



### 見どころ



本堂脇に鯖江市指定文化財  
推定樹齢400余年の御神木(大  
杉)の、まっすぐ伸びたその姿に  
「子どもがすくすくとまっすぐ育ち  
ますように」と祈願する人も少なく  
ありません。その傍らに、室町時代  
から近代にかけて造立された117  
基の石造物が遺存されています。こ  
れほど多く遺存しているのは、市  
内でも稀であり貴重だそうです。



### 近松との縁



幻想的な椿に何を思う…  
境内に群生する椿、散りゆく花が  
辺りを深紅に染めるその様は幻  
想的で美しい。幼少の頃、この寺  
の一角を借り住んでいたといわれ  
る近松は、どんな思いでこの花を  
愛でたのでしょうか。



ツバキ

## 恋話

KAN BANA

花言葉「完全な愛、完璧な魅力、理想の恋」

「あしひきの八重の椿つらつらに見とも飽かぬや 福点でける君」大伴家持  
見飽きることもあるでしょうか、この椿を植えたあなたを…椿は古事記にも  
登場する、神聖な樹木です。

※メッセージ「鏡の中の自分、見つめてみて」





近松の産湯伝説のある、千古の昔より湧き出る健康長寿の水

map ナンバー

12

## 榎お清水

えのきおしょうず



春慶寺本堂横の竹林の中の小径をほんの少し下って行くと、お泉水「榎お清水」のある山麓に出ます。ここは、千古の昔より湧き出ており、健康長寿の水として親しまれ、村人や旅人はお不動様の手を合わせ、お清水で喉を潤したといわれています。近松の時代、吉江藩主・松平昌親公は「榎お清水」を笥谷石で3つに仕切り、水飲み場と洗濯場を整備して村人の憩いの場とし、さらに吉江の城下町に水を引き入れるため木樋を敷設して上水道を整備しました。池の中心は三味線のバチの形をしています。



ひとやすみ



**お不動様が見守るお清水**  
近松の時代から、廻れることなく今なお水を蒸えています。カルシウムやマグネシウムなどのミネラル分が豊富で、濃度の炭酸ガスを含んでいるまるやかで清涼感のある水は、平成22年「ふくいのおいしい水」に認定されました。市指定文化財にも指定されています。



近松との縁



**近松少年が親しんだ水辺**  
お清水付近は「池原広場」として整備されています。その奥の崖から時折、お清水が湧き出る様は、見ているだけで心落ち惹かせてくれます。また、近くには蓮池や中瀬池があり、近松少年が親しんだ水辺の自然環境を再現しています。近松作品には、蓮の花が多く出てきます。この辺りで遊んだ当時を思い出して作品を描いたのでしょうか。



ここに  
スタンプを  
おしえてね！  
その名の通り「蓮池」で  
物語BOXに  
スタンプが  
入っています。



蓮や水辺に咲く花々を  
眺め楽しむことができます。



### ハス 恋話 KOSI BANA

花言葉 成すことなし 恋命 静寂

中国の伝説。夏の深夜、月の仙女は下界の川面を鏡に化粧をしていた。その美しさに見惚れていた川の主の心に惹きつけられ、葉の象徴とされるかんざしをうっかり落ととしてしまう。川の主は急いで水面に浮上するが、川面には蓮の花が一面に咲き乱れ、持っていたかんざしも蓮の花びらに変わっていた。川の主は唇を返すことができます。恋は実らなかった。

※メッセージ「結果を求めすぎないで、まずは冷静に」

## 江戸時代を代表する文豪

# 近松門左衛門

ちかまつもんざえもん

人形浄瑠璃や歌舞伎のすぐれた作品を数多く残した近松門左衛門(1653～1724)は、多感な少年時代、人間形成の大切な時期を鯖江で過ごしています。義理人情に悩む日本人の人間らしい姿を描き出す近松文学の土壌は、鯖江の豊かな自然と人情、風情に育まれたと言えるでしょう。「東洋のシェイクスピア」と呼ばれるほどに、人間の悲しさや悪かさ、やさしさを描いたその作品は360年を経た現在も愛され続けています。



近松門左衛門作書之像  
(18) 林泉文庫蔵

鯖江市では「豊かな自然につつまれる魅力と、  
人と歴史が見える「近松の里」づくり」をテーマに、  
住民と行政が一体となって、まちづくりを進めています。



「ちかもんくん」は、鯖江で少年時代を過ごした文豪近松門左衛門により親しみ、また近松文学に対する理解を深め、それをもとに「歴史を活かしたまちづくり」や「近松の情にふれあうまち鯖江」を広く内外にPRするための公募により決定。近松門左衛門の少年期をイメージして平成10年に誕生しました。



### 近松情報インフォメーション

鯖江市まなべの館 2F「近松の部屋」

〒916-0024 福井県鯖江市長泉寺町1-9-20 Tel.0778-53-2257

立待公民館 「近松の里めぐり情報館」

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2 Tel.0778-51-3376

近松会館 「近松情報案内所」

〒916-0024 福井県鯖江市吉江町15-77-7 ※無料レンタサイクルあります。

[www.city.sabae.fukui.jp/index.html](http://www.city.sabae.fukui.jp/index.html) (鯖江市ホームページ)

## 近松の里づくり事業推進会議

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2(立待公民館内) Tel.0778-51-3376

■さばえ近松文学賞2015～恋語 (KOIBANA) ～ ■

平成27年9月16日 発行

近松の里づくり事業推進会議

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2 (立待公民館内)

TEL 0778-51-3376

【電子書籍版】

発行社 [DoCompany出版 \(ボボブックス\) BoboBooks](http://bobobooks.com)

東京都港区南青山2-2-15 ウィン青山14階

TEL 050-3692-4434 FAX 03-6369-4449

福井県福井市灯明寺1丁目1301

TEL 0776-28-5233 FAX 0776-28-5234

<http://bobobooks.com>